

ポーランド月報

第5/6号

1982年
7月25日
頒価500円

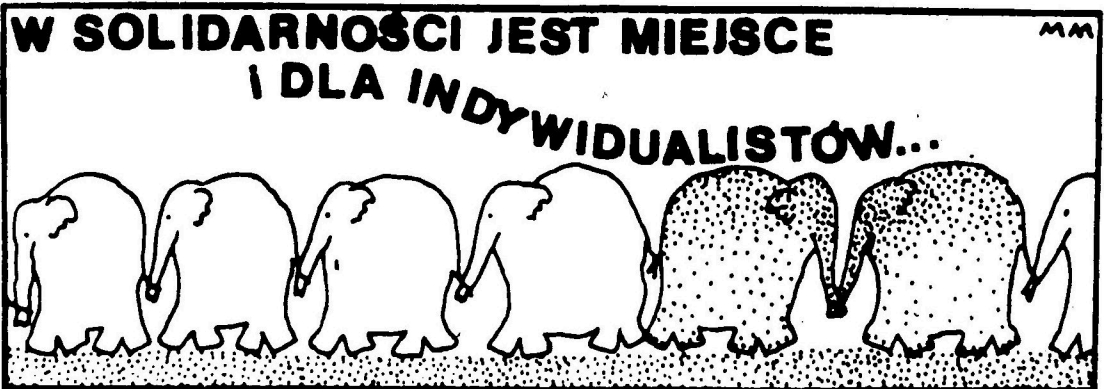
編集・発行：ポーランド資料センター 東京都千代田区三崎町2-10-5 同ビル3F
電話03-261-2585 郵便振替 東京2-81069

軍政3ヶ月——ポーランドの政治状況 2

- 黄金の角笛を手にして——J・クーロン
地下抵抗闘争指導者への公開状……………11
- 反核運動のこと ポーランドの民族国家のこと…15
- 再起した「農民連帯」……………16

ポーランド文学の偉大な経験

- ポーランドの亡命文学者たち K・ディブチャク…18
- ポーランドは豊かな国のはず A・グヴィアズダ…24
- 地底の闘い** シロンスク1981年12月(下)…28
- ポーランド日誌(1982・5・6 ~ 6・28)……………34
- ユーモアは死なず……………10
- ユーモアを武器に……………35
- 『ポーランド月報』全目次……………36



「連帯」にはヘソまがりの居場所もある

軍政3ヵ月

PRÓBA ANALIZY
SYTUACJI
POLITYCZNEJ KRAJU

——ポーランドの政治状況——

匿名論文 1982年3月 ワルシャワ

編集部注 軍政下の政治状況を分析した本年3月の論文を紹介する。支配階層を形づくっている軍と党の対立、ポーランド経済をソ連経済に編入する政策などが述べられており興味深い。著者は匿名である。文体、思考構造、問題提起の方法論などから著者は推察できるが、編集部ではここにその名を載せることはしない。

戦時体制が発令されて3ヵ月たった。われわれの置かれている政治環境は、軍隊によって支えられた官僚権力主義と性格づけることができる。そろそろこの政治解決方法の力学の分析をこころみるべきときだろう。この解決法は世界中でよく知られており、とくに中南米の政治状況下においては精密に研究されている。まず第一に注目に値するのは、かたや中南米のような生産手段の私有、かたやわが国のような国家所有という条件の差のもとで、いかなる相異がこのシステムの力学上発生するのかということである。第二には、わが国のケースのように一党独裁を官僚機構が非力化させることと、ラテンアメリカのように多数党議会制民主主義を廃絶することとの間に相異があるのか、あるとすればどんな相異なのか、ということである。

12月13日にポーランドで導入されたシステムは古典的な軍事体制の典型である。現在、この体制の3つの問題が明確に観察できる。

第1——テロ機構の分散と非統合。

第2——象徴的な矛盾：弾圧と恐怖をいかにしてポーランドを経済危機から抜け出させる行動にむすびつけるのか。

第3——社会と権力当局の媒介役を果たす構造をどのように作りだしていくかという問題。と同時に、権力にとって有利な12月13日以降の現状をいかにして維持し、社会を非機動的にするか、すなわち社会の巨大な一部分をいかにして活発な政

治活動から排除するかということ（たとえばわれわれ[「連帯」]のような——。「連帯」は政治に影響の内閣、阻止力のある内閣として関与していたが、意志決定への参加権はなかった）。

上記の問題について、順をおって考えてみよう。

それとはっきりわかるテロ機構の非統合性は、いくつかの次元で表面化している。戦時体制の発令にもっていった権力の連合が、いまや崩壊していることは明確になっている。ヤルゼルスキ將軍の軍人グループと党機関グループの間の対立が激化しつつある。12月13日からクリスマスまで続いた短くかつ過渡的な連合期間の後、対立は深刻化しはじめた。12月18日にはまだ、大学教授たちがヤルゼルスキと会合して党機関グループに注意するよう警告したのに対して、ヤルゼルスキは党機関グループを信頼できる唯一のグループだと評価し、かつ、ヤルゼルスキが自由主義者・改革主義者だという評価には冷笑をもってこたえ、自分自身を“教養ある教条主義者”と定義した。しかし1月のはじめから、党機関グループを中和しようというヤルゼルスキの努力が観察されている。

両グループの対立の本質は、現在作られている政治体制の中で、今後の国内状況の解決に際して党がいかなる役割を果たすかという点である。ヤルゼルスキ・グループには、国家による官僚権力主義システムの方向をめざす志向がみられる。こ

のシステムの決定機構では、党ではなく、軍に支えられた国家が主体となるのである。これは党機関の権力を相当制限することを意味する。この志向は中央レベルでは権力エリートの混合ということではっきりとはわかりにくい、県単位やそれ以下のレベルでは党委員会は地方権力の中心でなくなっている。つまり、対立の主たる要因は、党が内実をなくし形骸化するか、あるいは権力を手中にもった活性のある生命体になるかという点なのである。

対立の2番目の原因は、社会に対する弾圧についての意見の相異である。ヤルゼルスキ・グループは、ポーランドにおいてハンガリー・モデルを再現することが可能だと想像している。すなわち、強い衝撃で社会全体に恐怖感を与えておいて、その後には改革をこころみるということである。同時に、ヤルゼルスキ・グループは、衝撃を与えるのに、党機関のグループが考えているように階級を基準として対象を選ぶのではなく、単に偶然的[かなり無差別的]なものを考えている。一方、『ジョウニエシ・ヴォルノシチ』[ポーランド軍機関紙]に掲載されたミフタその他の論文によれば——これは党機関グループに近いものと思われる——、階級的テロの必要性が強調されている。つまり、現状をもたらした張本人と考えられている知識人層にホコ先を向けるということである。

1月はじめに行われた、ワルシャワ乗用車工場(FSO)のストライキ指導者に対する略式裁判で、党ワルシャワ委員会の活動分子でもある工場長のジェレツキが、起訴されていた労働者を無罪判決にまでもっていったのも偶然ではない。法的観点から見れば、この前例は驚きに値いし、同時にどのような力関係が存在しているかを証明するものであった。この事件は軍の支配層を激高させた。これは党機関の弾圧方針の構図を地でいったものだったのである。すなわち労働者を保護(すくなくとも雇い主としての国家を弾圧機関として利用したりしない)、知識人、大学、出版社、役人、行政などの層を攻撃するということである。

ヤルゼルスキの方針においては、広く脅しをかけることがまず第一である。その際、警察による弾圧だけでなく、経済的な弾圧も、最も効果的な圧迫の方法として広範に利用される。党機関グループはこのような方針に対してきびしい批判をあ

びせ、自称下からのピラ『労働者の基盤』(1920年代のロシアにおける“労働者反対派”を連想させる出版物である)の発行を提起した。このピラではWRONa〔救国軍事評議会〕が激しく攻撃されており、論調は激しくなる一方で、とくに最近のものではヤルゼルスキに直接矛先が向けられている。非難の内容は、「各職業グループに対して個別の条件をつくり、労働者階級を分断させることでギエレクの方針をむしかえしている」とか、「検閲にひっかかった何冊かの本の発禁を解除したりして、ほんの小さな寛容のみせかけをつくっている」というもので、また、ヤルゼルスキが教会と話し合うことさえやり玉にあげている。

第3に、ふたつのグループは経済政策構想についても対立している。軍政最初の数週間は、今よりもその構想のひらきが大きかった。党機関グループは、西側とのあらゆる関係を打ち切り、破産を声明する必要があると明言していた。一方ヤルゼルスキ・グループは、軍政初期に、どんな犠牲を払っても西側との関係を維持し拡大するようこころみた。しかし、2月はじめにマデ副首相がモスクワを訪問し、パイバコフ・ソ連副首相と会談した後、ヤルゼルスキ・グループの経済政策は党機関グループの方針にかなり接近した。ポーランドの長期的利益という観点からみると、経済的にも政治的にも非常に不利な政策が選択されてしまった。

さらに、両グループの間には労働組合に関する構想の相違がある。逆説的なことに、ある意味では党機関は「連帯」の同盟者である。すなわち、彼らは、職業別労働組合運動を組織するという〔ヤルゼルスキ・グループの〕構想を阻止したのである。とくに、党中央委員シヴァクは演説の中で、オーソドックスな階級用語を使って強硬な主張を行った。党機関グループの見解は、反体制派との関係をあらい流した労働組合をめざすということである。彼らは、労働者層から知識人を追い出すことで、その空白に党活動家の一部分がはいりこめると想像している。党機関の中のこういう考えを持った集団の特徴はイデオロギー至上主義で、そのリーダーはコチョーウェク・ワルシャワ第一書記だといわれている。彼の視点はまさにイデオロギーにこりかたまっている。この立場は、1948～51年のポーランドにおける初期スターリニズム

を連想させる。すなわち、“労働者階級の利益”の優先化、平等主義、反教会主義、新文化の創出、反官僚主義的傾向、である。この面で見れば、ヤルゼルスキ・グループの方は1951~55年の後期スターリニズム的、つまり、いわゆる官僚主義的のスターリニズムである。

いずれにせよ、労組問題についていえば、党機関グループの方がユートピア的である。興味深いのは、両派の反体制派に対する見解である。党機関にとって、主要な敵はKORである。ある意味でこれは共産主義者共通のことといえる。つまり、いちばん危険なのは思想的に一番近い敵なのだ。KORは社会民主主義的な色あいをある程度代表しており、彼らからみると最も危険な存在にみえる。なぜなら、同じ価値観の範囲内で活動しているため、ある意味で競争者だからである。

他方、軍政グループにとっていちばん危険なのは、外国とのつながりをもっているKPN〔ポーランド独立連合〕とNZS〔独立学生連盟〕である。2月の党ワルシャワ委員会でヤルゼルスキは、「主要な対立組織はKPNとNZSであり、KORの中には社会主義に反対しない人もいる」と言っている。

現状の不透明さはつまり、上記のいずれのグループが優位にあるかわからないところから来ている。双方とも、ソ連支配層内の様々なグループの支持を得ているからである。しかし、モスクワでブレジネフがヤルゼルスキを芝居っ気たつぷりに迎えたことから、若手ヤルゼルスキへの支持の方が強いように思われる。とはいえ、同時に、現在ソ連ではポスト・ブレジネフをめぐる抗争がつづけられていることも念頭におかねばならない。その抗争でソ連の党機関が軍人よりも優位に立てば、ポーランドにおいても党機関が優勢になる可能性は充分あるといえる。

ポーランド内部状況の不透明さは、また、党機関グループがいまのところ、自分の構想を強引に導入することはできぬまでも、ヤルゼルスキのいくつもの措置を妨害する力をもっているためにも生じている。

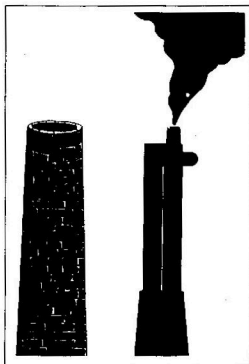
テロ機構の分散と非統合に関する次の次元は、軍隊が政治的役割を果たすことが軍自身に及ぼす影響である。これは、軍のいろいろなレベルで観

察することができる。中央では派閥化と政治化が顕著である。企業の軍事委員の出身階層である中間層は、権力ゾーンに自らが入ったことを明確に感じとった。ここで連想されるのはアフリカの軍事独裁である。アフリカでは自国のブルジョア階級に抵抗能力がなかったので、軍が直接企業に介入しなければならなかった。そこで士官たちが体験したのは、現実、すなわち行政の腐敗、無能、貧困その他に直面したことによるショックだった。ポーランドの士官たちも、長年通常生活から切り離されて兵舎での安定した生活を営んでいたため、同じようなショックを受けている。彼らは今までつねにお決まりのプロパガンダで飼われており、危機のスケールがわかっていなかったのだ。

最も不明確なのは、軍の最下層のことである。しかし、パトロールや駐在地の兵隊たちが急速に墮落し、民衆との公式には禁じられている関係に手をそめ、かつ自分に強制された役に対し精神的な疲労を感じていることからして、軍の気持は高くないと考えられる。こういうことは軍の戦闘力にとってマイナスであることはまちがいがなく、軍の会議の主要な議題になっている。このために権力ができるだけ戦時体制を短縮しようとすることも考えられるが、その条件として丁場の軍事化を正当化する法的処置をみつけることが必要になってくる。この点に関しては当局側は一步も譲らぬ考えである。経済危機が悪化し、抗議行動が起こるのが目にみえている以上、なおさら譲れない。

非統合の第3の次元は、軍と内務省の小さな緊張関係である。これは特に戦時体制の最初の数週間によくみられた。たとえば、ずっと以前から外国にいる人々の名前までが拘留者リストにのった事実は、指導権を握っている軍が嘲笑された原因になった。内務省は拘留者リストを訂正することもできたが、あえてそれをしなかった。現在、軍の仕事はZOMO〔警察機動部隊〕によって代行されつつあり、ZOMOの数も8万人までふくれあがっていて、両者の緊張がうすらぐことにつながっている。よく似た緊張感は、従来の立法構造、すなわち法務省および国会の各委員会と、軍政により新たに導入された立法手順との間にも発生している。これは白日のもとにさらされることはないが、評価しないわけにはいかない。職業倫理に

ついでの方の相違も表面化している。ボーナス〔クリスマスに支払われる特別手当のこと〕の払い方について軍と労働・賃金省の間でかわされた論議がよい例であろう。ヤルゼルスキ・グループは、ボーナスを、人々をおとしめるもうひとつの機会として利用しようとした。つまり、ボーナスを出すかわりに、ストライキは強制されたからやったという声明書に署名させようとしたのである。労働・賃金省の役人グループは、12月ストライキを今後の労働でうめあわせるという方策をより自然な形として主張し、それを認めさせた。この問題が解決されるまで、ライキェヴィチ大臣の顧問団とヤルゼルスキ・グループの人々との間で長時間の議論がなされた。経済危機のスケールを超えると、このことは、どう控えめにいっても超現実的である。上記の諸対立と緊張が同時に起これば国家のテロ機構はぜい弱化するが、そのことを過度に期待してはいけない。



鏡口は煙を吐き
工場生産はストップ

第2の問題は、恐怖感、軍事的規律および企業内軍事委員を維持する必要性と、合理的な経済活動とのバランスの模索である。

経済危機の時に舞台上に登場するというのが、典型的な軍事体制の性格である（中南米がよい例である）。ポーランドも同じだった。アメリカの上院議員がついに先ごろポーランドを訪問した際、ポーランド側は、戦時体制を布告した唯一の原因はポーランドの政治危機であったと明言している。これに関連して、ポーランド側は西側の経済制裁を非難し、軍事体制を導入したのも、IMFの条件——すなわち、土曜休日の撤回、自主管理運動と組合運動の弱体化——を満たすために必要だったと説明した。IMFは実際、借款を得ようとする国々にそういうことを要求している。12月13日直前にIMFの顧問がふたりポーランドを訪問しており、戦時体制下においていかに経済政策を実施するかについて助言した。この会談において、「連帯」については事実上一言もふれられなかった。なぜならば、双方とも、労働組合との対立は現実ではなくひとえに言葉の上の問題であり、当局側が挑発しなければ対立が起らないことを熟知していたからである。

戦時体制延長の可能性は主に経済状況しだいだというのは事実である。この面では、過去3カ月間に当局側の政策に発展が見られる。はじめ、当局にとって西側の経済制裁は非常に意外であり、当局は大あわてでその状況に順応するためのモデルを模索した。制裁に対応する努力がなされ、そのおかげでよりきびしい弾圧の方針が選択されなかった。しかし現在、当局側は順応のための、それもふたつの平面——西側の経済制裁とソ連からの強い圧力——に対応する解決法をみだしたようにみえる（ソ連の強い圧力とは、ポーランドが経済危機にあるとうと、コメコンへの輸出およびワルシャワ条約機構の武装の両義務を全うせよという要求である）。

選ばれた解決法はポーランドにとって非常に不利なものである。この方法では経済危機からぬけだすことがひどく困難になるが、ポーランド当局はこれが唯一の解決法だと考えているようである。その方法とは、ポーランド経済をふたつのセクターに分けるというものだ。そのうちのひとつのセクターは、全原料をコメコンから輸入し、生産物を全量コメコンに輸出する方針をとる。このセクターの生産手段の大多数は現在有効に稼働していない工場を充てるということになっているが、中には今まで国内消費のために生産していた工場も含まれる。このセクターに編入されるのは、軽工業の約60%、化学工業の約40%、造船全部、鉄鋼および機械工業の一部である。このセクターはソ連の原料を使い、全生産を引き渡し、ポーランド

国内にはインフレのみを発生させる。なぜなら、このセクターの従業員の給与は国内生産品を買うことで消費されるからである。このセクターの生産はわれわれの輸送能力とエネルギーを吸収する。すなわちこの解決法は、わが国内市場の深刻な危機を代償にしてコメコンの需要を満たすものである。特に、ハンガリー、チェコ、ソ連との生産協力が対象になっている。ポーランドにとって、これによる利益はある程度失業が軽減されることのみである。

この解決法から生じる基本的な効果のひとつは、ポーランド経済がソ連経済に深刻に隷属させられることだ。つまり、このセクターの生産はコメコンに輸出されるのではなく純粋にソ連計画経済に編入され、ソ連の管理・調整下におかれるのである。これはポーランド経済をソ連経済システムに再統合するものだ。その上、いわゆる経済運営プログラムにとっても悲劇的な結果を生むことであろう。なぜかという点、ソ連からの原料輸入は昨年比で20%減になる上、ソ連側がその使いみちを決定する権利を持つからである。ソ連のために稼働している工場にまず第一に原料が供給され、かろうじてそのお余りをポーランド当局が他の工場にまわすことが許される。すなわち、ポーランドは自国の原料基盤の操作の自由を失うことになる。われわれは今、この非常に苦痛をとまうプロセスの証人である。

そのうえ、西側経済界では、ポーランド経済のソ連経済への再統合過程は避けられないという意見が主流を占めている。なぜなら西側はポーランドが経済危機を脱するための援助——年間70~80億ドルの借款が必要である——を出すことに興味もないし、実際に出す可能性もない。彼らの意見では、ポーランドの経済状態は、ソ連経済への統合が——そのもたらす政治的帰結を考えても——唯一の道であるほどに壊滅的であるとされている。これはひとえにポーランド支配層の責任である。彼らは、まだ改革をする可能性が残されていたときにそれをせず、結果的にわが国をソ連の植民地にしてしまった。

ソ連は現在、経済のメカニズムを使ってポーランド情勢を完全にコントロール下におくことをめざしている。これはポーランドだけでなくコメコンの他の国に対する政策の一環として考えられて

いるようである。つまり、コメコン諸国の目前に迫った経済危機（とくにルーマニアとブルガリアで観察される）の状況下で、この危機の影響を直接ソ連に、とりわけソ連軍事産業に波及させないようにするにはどうしたらよいかという解決法パターン模索の一環なのである。ソ連の観点からいえば、この解決法は最も合理的である。なぜなら危機のあらゆる代償はそれらの国々が負担するからである。ソ連優先の生産方針の決定権を握ることと、わが国の経済管理機構に深く浸入することによって、ソ連は自分の損失を最小限に食い止めることができる。主たる関心事はいうまでもなく軍事力の維持なのだ。

当局の実行している経済政策の一面は上記のようなものである。一方、借款問題の克服の必要性という面がある。西側の経済制裁は現実には少額の借款を得ることさえ不可能にした。ポーランドの産業が西側経済にこれだけ依存している状況下において残された唯一のチャンスは輸出額を輸入額より大きくすることで（原料・半製品の60%は西側から輸入されねばならず、そのため現在では膨大な生産潜在力が眠ったままである）。輸出が輸入よりふえれば、銀行法により、6週間から3ヵ月位の短期的な借款を得ることができる。しかし、輸出の拡大は現状では不可能である。そこで、輸入の方をもう30%削減する決断が下された。それにより借款をえるのは可能になったが、反対に、経済の悪循環を発生させることになった。輸入を削減したことは国民所得がさらに20%も下がる原因になり、その結末は経済学専門家たちの想像を絶するものになるであろう。

以上のことは、国内市場状況のさらなる悪化、とくに農業生産諸手段の不足、農機具、農薬、消費物資の供給不能を意味する。農業の停滞の継続につながるこういう経済政策は、社会的緊張の増大をひきおこすことになる。当局もそれはよく知っているようである。

政府のマル秘報告にも、社会の不満の爆発を回避することはできないと述べられている。結果として、当局は戦時体制の延長、工場の軍事化およびストライキに対する法外な判決をつづけなければならない。しかし「連帯」にとってこの局面は有利なものかもしれない。当局側が、こういった

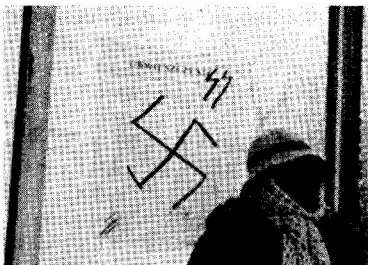
社会の爆発をある程度コントロールできるような地域組合構造が役にたつと考える可能性もあるからである。

さてそこで、他の経済政策は可能かという問が生じてくる。西側の専門家はポーランドに他の選択の余地はないと考えている。当局は経済改革導入をあまりに長い間引きのぼしていた。そして現状とはえば、改革ではなく、苦痛をとまう解雇決定を工場レベルへ押しつけた（各工場独自で資金繰りさせるようにした）だけである。産別の排他主義の打開もできなかつたし、農業のために工業生産構造を転換することも失敗に終わった。今年は、農業機械や肥料だけでなく、播種用の種子さえ不足するといわれている。当局は無能である。政策を打ち出しはするが、それを実現させる力はない。店舗の棚に多少商品がのっているといつて幻想を抱くのはよそう。飢餓や栄養失調に苦しんでいる人々がたくさんいる。生産は低下しつづけており、商品が残っているのはわれわれが購買能力がないほど貧しいからなのだ。

上記のような経済政策方針の下では、当局にとっては、国家の弾圧能力を維持することが考えられる唯一の策である。

もちろん、西側の資本を広く導入し、私企業化を推進することも想像上は可能だ。しかし現状の支配エリート構造では実現は不可能である。党機関の派閥が非常に強い影響力を持っており、彼らは現在の個人企業セクターの規模ですら危険視しているからである。もしこの派閥さえなければ、より自由なかけひきが可能であろうに。

同時に、軍のグループもコメコンとの密接な関係を維持する方針を論理的と考えている。彼らは、今まで軍として閉鎖的であり、軍事力弱体化につながるような政治制裁を回避し、経済的に自立を保つという方針を打ち出している。その上、1970年代に作られた膨大な量の新しい兵器を第三世界に輸出した結果、ワルシャワ条約機構軍の装備が旧式化したため、コメコンとの関係維持はなおさら重要なのである。比較的見通しの明らかな1970年代と違って現在は政治危機という条件下にあり、軍備強化が必要である。このことは経済状況をより深刻化させる要因である。



軍政布告ビラの上に書かれたナチスのかぎ十字

次の経済問題は農業政策である。党機関グループの方針は農産物義務供出であり、将来的には農業集団化をめざしている。ヤルゼルスキ・グループの方針では自営農民の保護をうたっているらしいが、戦時体制布告書においては徴発もありうるとしている。

ポーランド国内の需要をまかなう穀物類の量は350万tである。しかし現状ではわずか150万tしか農村から買いとられていない。この数字は自営農民から買い上げたもののみであり、国営農場およびコーポラティブ〔共同〕農場の生産については不明である。西側からの穀物輸入には限界があり、また、穀物の自由売買に対する行政制裁と飼料の輸入停止は、農民が穀物を隠匿することにつながる。アメリカが、自営農民のためという条件で飼料輸出制裁を緩和したところで、一時的な緊張緩和につながる可能性はなくはないが、来年になれば状況は今年並みもしくはより悪化するだけである。なぜかという、農民たちが、生産物売って得た収入で買うべき、消費物資も生産手段も供給されないからである。結果として、パンの配給化とよりきびしい弾圧政策が農村にとられることになるだろう。そういうわけで、経済状況は当局を弾圧強化の方向に押しやるのである。ヤルゼルスキ・グループは先に書いた“ハンガリー・モデル”に固執している観があり、現在の苦境は12月13日の打撃が弱すぎたからだ、せつかくの政策が横にそれてしまった、と考えているふしがある。軍人たちは幻滅を感じている。彼らは、社会がより強硬に抵抗し、より多くの犠牲者が出て、適度の恐怖感を社会に植えつけることができると考えていたのだ。グダンスクの海軍提督ヤンチンは、

公的な席ではばからずに、当局は数千人の犠牲者を予想していたと発言している。社会全体が組織化されるまえにむりやり恐怖効果を生じさせようと、政府が大規模な挑発を考えているのではないかと懸念される。

彼らは典型的な思考の誤りを犯している。「連帯」は以前、当局は社会と経済を指導できないから弾圧能力もないと考えていた。一方軍人たちは、弾圧で権力を握れるということは政治能力を得ることにつながる、と考えている。彼らのとった解決法は、恐怖感を起こさせる機構を唯一の道具として持つことであるが、現在は大衆の中の恐怖感は弱くなりはじめています。最終的にどのような決断が下されるかは、当局内にいろいろなグループがあることもあって予想しにくいですが、しかし、すべての徴候は、近いうちに何らかの対決をおこすための挑発がこころみられるという方向を示している。

ポーランド軍政の3番目の課題は労組問題である。

当局と社会の中間の構造が皆無の場合、政治を行うのは難しい。当局は、「連帯」が社会不満のはけ口になっていたことで、多くのケースにおいて「連帯」の存在が有益だったことを認識している。政労交渉は国民のフラストレーションを解消し、国民は実際に何かがおこり何かが解決されることを期待していた。当局は、緩衝地帯の役をする構造なしに正面きって社会と対面するのを恐れている。しかし、著しい活性ある構造の生成は望んでいない。彼らは、12月13日以前の事態、すなわち「連帯」が権力を抑止するような状況を恐れている。

中南米の軍政や70年代後半のポーランドのように、いわゆるコーポラティズム構造を作るには、一定の政治構造が比較的長期間存続し、定着することが必要である。コーポラティズム構造とは、政治機能を果たすべく作られたものではなく、いろいろなグループあるいは集団の利害を代表する公的な組織である。たとえば各職業ごとの協会とか宗教団体なども含まれる。このコーポラティズム構造という解決法は当局にとって都合がよい。なぜなら、これらのグループは当局側が話をした

いと望むときにしか当局の前に登場しないし、特定の視点だけを代表しているため、互いに競争もしないし、それにどのグループも社会全体を代表することはできないからである。しかしこの解決法は整った形式を持っていないし、法律的にもはっきりした枠が記載されておらず、決定権や権威の所在もはっきりしておらず、非常に遊離したものにもついている。わが国の場合、社会のいろいろな力が急激に再結集してしまっているし、党の現実的な役割が、とくに党の下位レベルにおいては不明であるという条件下にあり、コーポラティズム構造が再生するには相当時間がかかるであろう。

こういう状況下において、仲介役として教会が浮かびあがる。軍政初期、ヤルゼルスキはグレンブ首座大司教との話し合いに非常に関心を持っており、教会がアクティブな政治的役割を果たすのではないかと考えられていた。現状ではこの件については不透明である。教会の各位階層（ヒエラルキー）における急進度は一様ではない。首座大司教と地方の教区司教の何人か（グルビノヴィチやトカルチュク）の間には相当の見解の相違がある。教会ヒエラルキーは、ポーランド経済のソ連経済への再編入および、極度に反教会的な意図を隠そうとしない党機関グループを、教会全体に対する脅威として深刻に受けとめている。このように、教会はその時その時の政治的対応には関心がうすく、それよりも教会の存続という観点から全体的にものを考えている。教会ヒエラルキー内では、1950年代のように“沈黙する教会”の役割を果たすべきだという文書がまわされている。その文の中では、教会の全構造の存続が最前提になっている。そういう点で、つい先ごろ発された“非政治的な教会”というパチカンの声明は非常に象徴的である。要するに、教会は現在のところ政治に何らかのアクティブな形で参加することはないと考えるのが妥当であろう。これは、ある意味では党機関グループの勝利である。

そういうわけで、当局側は、“独立している”という印象を与えはするが、実際は完全に当局のコントロール下にあるような構造を作ることを課題にしている。その一環として、中南米の、“いわゆる民主主義的機関”のような構造を活性化しようとのこころみをかきねている。たとえば、消

費者団体のような組織である。今まで、あらゆるクーデターのあとにこのような機構が活性化されたが、この構造を社会の代表とすることは基本的に幻想でしかない。社会の全員が、他の何者かである以前にまず第一に消費者であるなどということとはありえないからである。

中南米の軍政は、労組の分断や壊滅のためにあらゆる手をうった。しかし、それらの国々の状況がわが国と違うのは、まず、国家が雇用主でないということである。すなわち、中南米の軍政は工場の門の前で止まらねばならない。また、労働者社会に対して経済的弾圧を加えられないので、わが国にくらべて警察の弾圧がより厳しい。ポーランドの警察による弾圧が比較的ゆるやかなのは、当局側が経済的弾圧の手段も握っているからである。それゆえ、ポーランド軍政はかなづちとかなとこの間にあるように思われる。一方では完全に労組を管理したいのだが、多方、交渉でなされた妥協が社会に対して拘束力を持つようにするため、ある程度社会の信用をえている構造を必要としているのである。この問題については軍政内部に統一見解がなく、構想も作られていないようである。

ポーランド政治力学のもうひとつの内的要因は、上に何度か述べた党の役割の問題である。軍政を敷くにあたって、ヤルゼルスキは、党の解散の展望を持っていたように思われる。南米の軍政も同様の行動をとった。ポーランドではそれは成功せず、非常に好ましくない状況が発生した。党機関の派閥は、行動の可能性を得たわけである。ヤルゼルスキは、戦時体制を発令する一日前に、党の各組織を上から解散させたり、党の第一書記を上から解任できるなど、強度に中央集権化された決定機能の構想をもちこんだ党規約改訂によって、派閥の活動を阻害しようとした。しかし、この改訂は両刃の剣であった。結果的に、党の県委員会に下部の水平構造を解散させる権限を与えることになり、県委員会の強化につながった。この計画は不完全に終わった。戦時体制布告の前日のヤルゼルスキの第二の行動は、党中央委員会機関のほぼ全員を地方に送り、地方の委員や顧問として行動させようとしたことである。送られた人々は、数日間地方に埋もれてしまう結果になった。その

おかげで党機関の迅速な反応が不可能になり、党は現実的な危機感を感じるようになった。すなわち、党が権力を失いつつあることが明白になったのだ。戦時体制導入後、党内ではネガティブ・セレクション【おべっかや密告や不正をする人間ほど上の地位につくこと】が一層ひどくなった。イデオロギー的な政策をコチョーヴェク・ワルシャワ第一書記のような人々のためにつくる、イデオロギー的ユートピア・グループは数少なくなった。残りは、党にいて生活できない人間である。そういう人たちが、今の党の決定権を握っている。かつて党大会の代議員による選挙で選ばれた1500人の書記たちが、戦時体制下で解任されたことは、事実上、党の民主選挙を無効にした。彼らのいた地位を、ネガティブ・セレクションで進出した人たちが占めた。結果的に、党は、今までの党の歴史上いちばん危険な存在になっている。社会的に何らかの信任をもつ人は党内にいなくなったといってよい。党の要職は、権力を維持することしか考えず、経済改革などには全く無関心な人々で埋まっている。多くの場合、彼らは単純な復讐心で政策方針をたてることしかしない。たとえば、トルン県では、自主管理によって選ばれた企業長全員、党の水平構造運動の人々、そして第九回党大会代議員のうち数人が今もって拘留されている。

現在党の決定権を持つ人々は、12月13日以前には、民主的に選ばれた、理念を持った党代議員のかげに隠れていた人々である。この状況がなぜ危険かという点、こうなった党は、80年8月以前の状況、つまり党が権力の中心であった状態をめざして権力闘争をするからである。

ここで重要なのがヤルゼルスキの役割である。党機関は、党を中和化させるためにヤルゼルスキが党第一書記になったという認識をもっているからである。ヤルゼルスキは、去年の秋から始まった政策、すなわち、党でなく国家が権力の中心になる政治システムへ移行するという構想を継続している。党が社会的役割をほとんどなくしてしまった現在、この構想がいちばん長続きしそうである。

ソ連がこの政策を支持しているのは間違いないだろう。また、このような構想は対立を生まないという観点から、他のコマコン諸国にも適用できる

可能性がある。そのため、このことは、コメコンの小国（ルーマニア、東独）の党エリートに大きな不安を抱かせる。

職業的な党機関員にとって、これは完全な敗北である。12月13日の戦時体制導入のひとつの原因は、党機関が独自に準備していた闘争計画——「連帯」だけでなく、ヤルゼルスキ・グループをも対象にしていた——をくいとめることだった。この闘争は、12月15～16日、ヤルゼルスキがプレジネフの誕生日にモスクワへ行って不在の間に行われる予定であった。「連帯」マゾフシェ地区本部の集会を利用し、「連帯」の急進派に化けた人々がワルシャワ工業大学の党活動家たちの集会を解散させる、という筋書きだった。ひょっとしたら、ヤルゼルスキはクリコフ〔ワルシャワ条約機構軍最高指命令官、ソ連赤軍元帥〕にこのことを耳うちされ、自分の計画の実行を決断したのかもしれない。要するに彼は、党機関グループと手を結び、軍内部の分裂をさけるために自分の名前を出し、また、あらゆるレベルでの即座のコントロールを可能にするために軍の執行グループも提供し、党にこれらを一緒に使おうともちかけた。その代償に、党機関グループは、社会に対する非常に暴力的な弾圧計画と、ラコフスキやバルチコフスキやクラスツキといったタイプの人間への攻撃をさしひかえることを約束した。

要するに、ふたつある弾圧計画の中から、ヤルゼルスキはいわば小さい方の悪を選んだともいえるだろう。戦時体制導入のもうひとつの要因は、グレンプ首座大司教が12月6日に国会に提出した手紙である。それは、政府に特別な全権委任をし

ないようにという内容であった。ヤルゼルスキの考えていた社会との対決案は、まさにその全権委任をもとにして、軍の地方執行委をつかい、「改革的に」軍を基盤としたシステムをつくることであった。しかしその構造はいつでも弾圧計画に切りかえられるものであり、実際にそうなった。同時に、党機関グループは党大会以来、ヤルゼルスキに対する攻撃を準備していた。要するに、12月13日までポーランドには現実にはふたつの権力が存在していたが、それは「連帯」ではなく、党機関とヤルゼルスキ・グループだったのだ。

結論：

- 1 管理とコントロールの機構の非統合は、その機構の無能さや行動の混乱を深刻化させている。
- 2 選択された経済政策は、わが国を半植民地化する。他の方策がみあたらないのは、権力側の感情のせいである。
- 3 権力は、自らのコントロール下にありながら、同時に権力と社会の間の緩衝地帯でもあるような労働組合を望んでいるが、それは丸いものを四角くしようとするものである。このことが、現在進められている、労働組合についての“民衆的な”（“コントロールされた”と読め）話し合いのまともりのなさや欺瞞性の原因となっている。

“Biuletyn Informacyjny” nr. 58, 1982, 5, 9
New York より。〔訳：梅田芳穂・高橋初子〕



黄金の角笛を手にして

ズビグニェフ・ブヤク、ヴィクトル・クレ
ルスキら地下抵抗闘争指導者への公開状
ヤツェク・クーロン

〔編集部注〕 戒厳令下のポーランドで展開されている抵抗闘争の戦略と戦術をめぐる論争を引き続き紹介する。ここに訳出したのは、論争の口火を切った J・クーロンが、マゾフシェ地区指導部の Z・ブヤクおよび W・クレルスキの批判（いずれも『月報』第4号21頁以下に収録）に反論した論文である。論争全体の文脈とクーロンの主張の真意がより一層明確化されている。なおこの論争には上記3名のほかに、ズビグニェフ・ロマシェフスキ（KORのメンバーで「連帯」マゾフシェ地区本部幹部会員、「連帯」全国委員会委員）、アレクサンデル・ハル（「青年ポーランド運動」の指導者、グダンスク地区の「連帯」指導者）なども加わっている。翻訳には仏語テキスト（“Inprecor”, No 128, 14 juin 1982, P. 20-21）を使用した。

『週刊マゾフシェ』第8号に発表された論争から明らかのように、ズビグニェフ・ブヤクおよびヴィクトル・クレルスキと私との間には、情勢に対する評価および行動方法の選択をめぐる重要な相違がある。それは重大なことではない。しかしわれわれの間の論争を十分理解することは必要である。論争を不毛なものとしないうためのいわば議論の基本だからである。

違いは何か

1 私の理解が正しければ、諸君たちはわれわれが“社会的自衛”と呼んでいた1980年夏以前のイメージの社会運動の建設を提案している。その運動の基礎はさまざまな環境の下に暮らす人々が自分たちの直面する諸問題を力を合わせて解決することを目的として作った組織である。このような自己組織化は、出版や教養サークルや綱領的問題の討論といった最も普遍的な活動の発展のための基礎たりうる。1976年に書いた「行動綱領に関する省察」という文書の中で私は、こうした普遍的活動の基礎の上に結成される部門別、地域別の活動グループの完全な自立性に支えられてのみ、社

会的自衛の運動は可能であると主張した。自己宣伝的で許してもらいたいのだが、私が強調したいのは、諸君たちが擁護している考え方がいかに私のそれに近いかである。こうした考えの正しさは事実によって証明され、これが1980年夏の勝利をもたらしたのだ。この勝利はもはや逆転不可能である。したがってこうした運動についての考え方が今日、きわめて広範な支持を得ているのも何ら不思議ではない。われわれはつねに、歴史的アナロジーを探しながら、そしてまた経験に依拠しようと努めながら物事を考える。しかし忘れてはならないのは、われわれは何よりもまず闊い条件によって決まる行動の方法について議論しているということであり、その条件は今日では1980年夏以前とはまったく異なるということである。

余裕のない軍政

2 自衛の運動を發展させるために不可欠の条件とは何だろうか。私の考えではそれは次の3つである。

- さまざまな人間が行動できること。
- そのような行動が成功を取められること。

—この運動が構築されるべき枠組としての社会体制が、その発展を許す最低限の余裕を有していること。

エドワルト・ギェレク下の体制（1970年以降）は最初の2つの条件を満たしていた。当時の支配者グループは社会のコンセンサスに基いて統治することを望み、それゆえにこそ、圧力を前にして譲歩するよう国家機関を導いた。

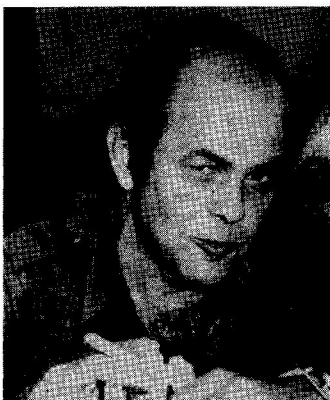
今日、將軍たちと党書記たちは、単に社会のコンセンサスを無視するだけでなく、それに逆らって統治する決意でいる。彼らの権力の基礎は、示威行動をけちらし、ストライキを粉砕し、逮捕し、拘禁し、こん棒で殴り、発砲し、等々のことをやるその能力にある。將軍と党書記たちがこのような能力を手に行っているかぎり、彼らは圧力を前にしても一寸たりとも譲歩しない。これはすべて、すでに言いふるされ、実証済みである。この点についていざさかの幻想も抱いてはならない。しかも彼らは、要求されたからといって譲歩することは不可能である。術策をめぐらす余裕が一切ないからである。

彼らは、賃金を切り下げ、労働者の首を切り、食糧の割り当て量を減らす以外に何もできない。そして諸君も承知のとおり、いかなる社会運動も—国家の共同運営を考えるのでないかぎりは一経済的諸要求を放棄するのは不可能である。真の社会的和解なしには、わが国経済のますます深化する死の苦悶を阻止できない。私の「テーゼ……」はまさにこの指摘の正しさを確認することから始まっている。ところが諸君たちは、残念なことに論争の中でまさにこの点を無視しているのだ。

それゆえに、戦争状態という条件の下にあっては、自衛の運動であれ他の形態の社会的運動であれ、単にそれが存在するという事実により体制の暫次的な変化を実現できるとは期待しえないであろう。

抵抗運動は何をめざすか

3 大衆的な地下運動が発展しつつある。その中で出版活動や教育活動、そして何よりも社会の希求を表現するさまざまな形の行動を組織することは可能である。人々が危険をもちえり見ず地下運動に参加してくるのは、そのような活動に加わる



ためであろうか。私はそうは思わない。大衆的な社会運動はつねに重要な社会的希求の反映であり、その実現は、組織的な共同行動によって可能となり、ことような行動によってのみ可能となる。

教育はこのような運動なしにも可能である。出版活動は、それ自体が目的であれば、社会のごく少数部分に参加するだけである。示威行動はさしあたりいかなる成功ももたらさない。それは、たしかに、運動の力を表現するかぎりにおいて、士気高揚のためにきわめて重要である。だがこの運動の力が士気を高める役に立つだけであれば、それは時とともに無力化してゆく。

現在、多数の人々が組織的な任務に従事している。彼らは、追求されている目標の実現に結びついた諸任務を遂行するための大衆組織を建設している。今の所、最も限定的で最も大衆的な目標は正常な暮らしを可能とする条件を獲得することである。諸君たちが掲げた任務は、他の部門別、地域別活動のすべてもそうであるが、この目的の実現に向けて1ミリといえ前進するものではない。いかなる地下活動も、それ自体としては、この目的の実現を可能とするものではない。というのは、地下活動というものはつねに、何ごとかの準備であるからである。何のために準備しなければならぬかが具体的に示されなにかぎり、あとに残るのは目的のない組織と、幻滅、不満、憎悪だけである……。そしてこの憎悪がテロリズムを生み出す。

中央指導組織は、実際に存在して運動のすべての構成要素を指導できるとすれば、絶望と激発の行動が生じるのを、ある程度まで防止することができる。だがこうした指導部も、もしそれが現状克服のプログラムを持っていないことが明らかとなれば、運動に対する影響力の一切を失なうほかないであろう。ついでに指摘しておけば、現在進められている組織的活動は、ごく自然に運動の中央集権化をもたらすであろう。「連帯」指導部、そうではなくてもその一部が、この動きにブレーキをかければ、その場合には多数の中心が生まれ、それが、必然的な抗争はともかく、挑発のための格好の条件を作り出すであろう。

避けられない社会的爆発

4 諸君たちは、人々がまだ長い間待つことができると言い、歴史的経験に言及する。この点では事実に関する認識の相違がある。昨年間に国民所得は13%低下した。権威ある公式発表の見直しによれば、東側からの大量の援助と西側からの多少の信用供与が得られたとしても、今年の国民所得はなお、さらに17~22%低下しようという。東側から大量の援助は得られないだろうし、西側からの若干の信用供与の獲得はまず考えられないが、このことはさておく。

新たに20%低下するということだけを考えてみよう。これは近代社会の歴史上前代未聞の破局である。その経済的、社会的、精神的影響は誰にも予見不可能である。

ポーランド人はこのような破局にも平静に耐えることができると諸君は言う。しかも権力がその偉大さと行使してやまないそのテロルとによって国民をたえ間なく挑発しているという状況の下にあって、いかなる根拠に基いてか？ 1月から今日にいたるまで彼らが忍耐を示してきたという事実にか？ 生活条件が将来も悪化し続けるという事実はさておいてもよい。だが忘れてはならないのは、われわれも全面的に承認するポーランド社会の成熟とは、彼らが「連帯」に対して抱いている信頼以外の何ものでもないということである。すなわち、諸君たちと抵抗運動に対する信頼である。

人々は今でも絶望し、怒り、たけりくるって

る。だからこそ彼らは諸君たちが呼びかけた（あるいは彼らが諸君たちが呼びかけたと信じた）行動に身を投じる。彼らは、諸君たちが道を知っており、自分たちを勝利に導いてくれると考えている。だがやがて間もなく彼らは、地下にとどまれというスローガンが、敗北につながる最も高価な道であることに気づくだろう。その時間が生じるだろうか。多分政府は全国的爆発を押さえることができるだろう。多かれ少なかれ局地的な多数の爆発が生じ、いずれにせよ流血のうちに鎮圧されるだろう。経済の破局による物質的、社会的、精神的影響をこれにつけ加えなければならない。たとえ外国の介入がなくとも、われわれは国家の崩壊を目のあたりにしなければならぬ。「連帯」が新たな敗北を許すことができるか、私は知らない。だが戦闘を拒否すれば敗北は避けられるとは私には思えない。

妥協を強いるために何が必要か

5 「連帯」を組織することにより、われわれその指導部は巨大な責任を引き受けた。今日、基本的な諸問題に対し回答を拒否することにより、この責任から逃れようとは思わない。戦争状態宣言がポーランドにもたらす破局を回避するために、社会の側が最大限の譲歩をする必要があることを私は宣言する用意がある。しかしこの譲歩は、社会的妥協のために不可欠な条件の実現、すなわち政府が（さまざまな名前の、さまざまな顔だちの人たちを通じて）自分自身とだけでなく社会と協議するような状況の創出を妨げるようなものであってはならない。一言で言えば、妥協の条件は、国家権力から独立して組織される1個の社会の存在である。

将軍や書記たちが自ら進んで妥協を受け入れるという希望の上にプログラムを立てるのは不可能である。暴力は暴力を前にしないかぎり後退しないことを認め、抵抗運動が力の利用を拒ばまないことをはっきり宣言しなければならない。

私の考えでは、「夏まで」とか「秋まで」といったように期日を限って、このような宣言を正確に出すことが必要である。絶望とやみくもの行為を防止する最良の手段はこれである。この期日が来れば、全国で組織される社会的意志表示の示威

(ろうそくを灯す、何分間か沈黙する、ハンガー・ストライキ、衣服に共通のしるしをつける、短期間のストライキ、その他)すべてが、この脅威を思い知らせ、運動の用意ができていないことを実際に示す。この運動はただちに、可能なあらゆる手段により、兵士と警官の間で煽動を開始するものと私は想像している。彼らに対し、自らを組織し、組織間の連絡を維持するよう呼びかけなければならぬ。私の考えでは、これこそが運動の主たる課題でなければならない。

宣言されるべき決起は、もちろん、無期限のゼネストという形をとることもできる。しかしこれを実施すれば、われわれは將軍と書記たちに対し任意の地点を攻撃し、こうして彼らの人的、物的優越性を特定地域に集中する可能性を与えることとなる。それゆえに、兵士と警官の大半がわれわれに協力するという保証がない場合、われわれの側に移行する用意のある一部の兵士と警官の協力を得て、ストライキと同時に特定の権力および情報の中樞を攻撃することが必要である。ストライキ中の工場が脅威にさらされる場合もこのような攻撃が実施されることを宣言することもできよう。

決起に対する恐怖は將軍と書記たちの態度を硬化させるとする主張の背後には、多分、恐怖以外にも彼らに譲歩を強いるものがありうるという考えがあるであろう。抵抗運動が暴力を使用しないと宣言することは、彼らに誤解を与える。彼らは安全だと感じ、譲歩する意図を持たないだろう。

たしかに政府当局者は国民的和解と社会的合意をめざして司教会と協議している。しかし彼らは、およそ合意に反する行為を合法化するためにそうしているのである。現実の危険が存在するようになった瞬間から、司教会は交渉相手であることをやめて調停者となるであろう。ポーランド首座大司教社会評議会の穩健な提案が、公式の提案に対する唯一の対案であるがゆえに今日では過激なものと考えられていることを忘れてはならない。諸君たちが交渉相手であると考えられるようになれば、この教会の提案は唯一の現実的な妥協のための基礎となるであろう。たしかに、このような妥協が成立すれば、脅しをかけていた連中は社会のすみっこに追いやられよう。それは仕方のないことだ。

兵士を獲得せよ

6 諸君に攻勢に出よと言っているのではない。そうではなく、抵抗運動の中心と効果的な情報網の組織化を要求しているのである。はっきりと強調しておかねばならないが、それは抵抗運動のさまざまな鎖の環の自立性をいささかでも制限するものではない。そうではなく、それは挑発と無分別な行動の危険性を制限する。なぜなら、ある種の行動はもっぱら中央の責任に基いてのみ実施されるからである。

私は諸君がこう宣言するよう訴える。政府が社会に耳を傾けず、さまざまな形で表明されるその意に応じないことを拒否し、祖国を破局から救うためにイニシアチブをとろうとせず、社会との和解を受け入れないならば、その時には抵抗運動は暴力の行使を余儀なくされる、と。

最後に私は、諸君が兵士と警官の間で煽動を開始するよう呼びかける。それはすなおに受け入れられるであろう。このことだけでも、それは権力にとって致命的な危険となろう。

そして何よりも、抵抗運動の中心的指導者の全員が一一致するプログラムが必要である。

この論文の学者的な調子は許していただきたい。諸君らが懸命に仕事をしていること、諸君たちの成功が絶対に必要なことは私も知っている。しかしわれわれは出口なしの状況下に置かれている。このような状況に対し、多分われわれは準備ができていなかったにもかかわらず、われわれはこれに面と向かわなければならない。袋小路のように見えるこの状況からの出口をさし示すことは、われわれの任務である。

諸君たちは自ら好んでこのような重荷を引き受けたわけではない。しかし諸君たちはそれを逃れることはできない。諸君は黄金のつの笛を手にはしている……。

ヤツェク・クローン

「ティゴドニク・マゾフシェ」第13号
ワルシャワ、1982年5月12日

原題: Maciej Teraz Złoty Róg

(訳: 水谷 駿)

反核運動のこと ポーランドの民族国家のこと

前野 良

1979年12月NATOがユーロ・ミサイルの配備を決定したことを直接の契機として、ヨーロッパ全域にわたって反核運動が爆発的にひろがっていった。「戦域」の中心にも予定されている東独にも教会を中心として非核化の運動がおこり、ソ連圏社会、とくに軍部に大きな衝撃をあたえてきた。この新しい反核運動は、50年～60年代の平和運動、即ち、ストックホルム・アピールやラッセル・アインシュタイン宣言に象徴され、又主として世界平和評議会やCNDを中心にして行われた運動とくらべ歴史的にことなつた性格を内包している。50年～60年代の運動の理念あるいは目標は、核兵器の禁止と東西世界の平和共存であった。今日の反核運動は、国と国との外交的、国際的諸関係の点よりも、むしろ今日のヨーロッパ社会（文化）を根底から問い直すという思想が運動の基礎にあり、それを支える主体もまた国境をこえ、労働、地域の生活のなかから生れた草の根運動であると言つてよい。

今日の西欧の反核運動のひとつの潮流を形成しているENDは、80年に提起した核軍縮アピールのなかで次のことを主張していた。即ち「われわれは、ポルトガルからポーランドにいたる全ヨーロッパ地域を核兵器、空軍および潜水艦基地から、その核兵器の研究、製造に従事する全構造から解放するために共に行動しなければならない」とそれは、戦後形成されたNATOとワルシャワ条約機構の解体の中からヨーロッパの統一と自立を求めるものであるが、それは単純な「ヨーロッパ・ナショナリズム」の復活を意味するものではない。

この運動の理論的リーダーの一人といわれている歴史学者、E・トムソンあるいはケ

ン・コーツは、この運動をヨーロッパの新しいルネッサンスであると規定している。再生というのは、それは、第三世界との連帯の意識にうらづけられており、第三世界への武器輸出や抑圧に反対する諸運動にささえられているということ。ながらく第三世界抑圧の中心であった西欧社会の告発の意識にささえられていること。第二には、原発に象徴される巨大テクノロジーの抑圧社会に對置し、新しい生活様式と文化をめざすショップ・スチュアートや地域の諸運動にささえられているということである。それは、70年代においてたたかれてきた、反原発・エコロジーの諸運動、人種差別反対、婦人解放、植民地抑圧反対などの諸運動の流れの中で大きく形成されてきたのである。このような意味でのヨーロッパの再生と核廃絶は、ヨーロッパの新しい地平をつくりあげる歴史の過程であるといつてよいと思う。

ポーランド「連帯」の運動もまたひらかれたヨーロッパの新しい地平のなかにその未来を位置づけることが出来よう。「連帯」は、長い展望のなかで民族社会の自立を求め、排外的ナショナリズムの立場をとっていなかった。昨年12月に発表された「自治共和国クラブ」の声明では、「自治共和国は近隣の諸民族と平穏な関係を保ち、白ロシア人、チェコ人、ドイツ人、ロシア人、ウクライナ人との協力の土壌をつくることを望む」とし、「われわれの希求するのはポーランドの属する中欧の非武装化と世界平和である」としている。トムソンは、現在、1957年の有名なラバツキーの中欧非核化の構想をとりあげているが、それは、ヨーロッパ全地域の構造的再生のなかに位置づけられているものであろう。



再起した「農民連帯」

戦時体制の即時撤廃を！

以下に掲げるのは、「農民連帯」地下組織の創設を告げる本年5月25日付の宣言と、同日付の農民への呼びかけである。「農民連帯」に関しては、雑誌『流動』5月号に、政府とのゼシュフ協定の邦訳が掲載されている。また、本文中に出てくるヤン・クワイは、「農民連帯」議長を務めていたが、戒厳令後に転向宣言をした人物である。

[編集部]

農民たちへ、ならびに独立自治 自営農民組合「連帯」メンバーへ

戦時体制下の諸制限で、独立自治自営農民組合（NSZZ RI）「連帯」設立準備全国委員会は、限られた範囲内においてさえ活動することあたぬ組合機関になってしまった。また、ヤン・クワイに関していえば、彼がテレビに出て、「連帯」をけちらし組合員を弾圧している連中の側につくと公式に声明し、ためらいもせずに組合の仲間と断交してしまった以上、彼にはもはや「農民連帯」の中でどんな役目も果たす資格はない。

これらの理由から、「農民連帯」メンバーたちは、戦時体制下での地下指導部を創設することが不可欠だと確信した。この考えを実行に移すべく、1982年5月25日、ヴィエルコポルスカ県においてNSZZ RI「連帯」活動家たちが会談し、正式な組合が休止している期間中の全ポーランド組合指導部を設立した。名称は、NSZZ RI「連帯」全国活動家暫定統合グループ（TKKGD）である。

NSZZ RI「連帯」TKKGDは同時に、カトリック農民祭に際して声明を出すことと、上記の周知の理由から、ヤン・クワイをわれわれの組合の議長とは認めないことを決議した。

1 このに設立されたNSZZ RI「連帯」TKKGDは、レフ・ワレサを「連帯」運動全体の精神的指導者とする。

2 ポーランド司教団社会委員会による“国民的和解”構想をポーランド人民共和国政府との会談の基礎とし、同時に、今までの、NSZZ RI「連帯」各県委員会幹部と各県の設立準備委員会議長を、NSZZ RI「連帯」代表者とみなす。

3 1981年4月12日に国会議長と副首相のカジミェシュ・バルチコフスキに手渡され、NSZZ RI「連帯」によって守られつづけてきた“趣意宣言”を保持しつづける。

決議の中では、今年5月12日にNSZZ RI「連帯」のために国中の教会で行なわれた礼拝に参加した聖職者、組合員そしてシンバの人々への感謝も表明された。

独立自治自営農民組合「連帯」
全国活動家暫定統合グループ

1982年5月25日

声明

独立自治自営農民組合「連帯」 全国活動家暫定統合グループ

農民諸君！

カトリックの農民祭のこの日、戦時体制の辛い日々を送っている諸君に呼びかける。よりよい明日を願っていたすべての人々を打ちのめした12月13日の打撃は、復興しつつあるあらゆる民衆の運動とそしてNSZZ RI「連帯」をも狙ったものだった。われわれに対する戦いが、史上最も価値観をとまなう国民的スローガンでおおいかくされており、一方NSZZ RI「連帯」に組織されていた人々が迫害されていることは、痛苦の限りである。

こういった状態は単に悪い結果を招くにとどまらず、破滅的状况につながることも考えられる。ここでわれわれが確認すべきことは、民族自決権及び自分の力と尊厳の意識への熟望が、今日社会のあらゆる層に浸みわたっているという点である。自分自身の足で立ち、自分たちの組織をつくり、強い性格を持つことが必要だと、社会のあらゆる階層が理解しているのだ。当局の御好意を期待している者などひとりもない。皆、すべての面における発展の自由が保証されることを望んでいるのだ。

こういった現状を前にしてわれわれは、これ以上の戦時体制の継続に対して断固抗議するよう提起する。そして、最高の国民代表機関としての国会

に対し、国家の基本である公止の原理の名において一刻も早く憲法に基く政府を復活させ、厳然とした態度で権力機関にわが国民の尊厳にふさわしい行動を命ずるよう呼びかける。

そして、NSZZ RI「連帯」のメンバーである諸君に対しては、愛国の指示を出すものである。平常心を失わず、祖国につくし続けてほしい。どこにいようと——ポーランドのまん中だろうと東部国境地帯だろうと——君たちは一体であり、いかなる暴力もいかなる策略も、あらゆる犠牲をいとわずに今や踏みにじられているわれわれの神聖な権利をめざしてたたかおうという君たちの心構えを打ち砕くことはできない。われわれは政府に対し、今後も完全に独立した立場をとりつづける。そして、政府側の要請に対するわれわれの態度は、政府がわれわれ国民の要請をどの程度受け入れるかにかかってくるであろう。

ポーランドいまだ滅びず！ 独立自治自営農民組合「連帯」万歳！

ポーランド 1982年5月25日

独立自治自営農民組合「連帯」
全国活動家暫定統合グループ

ポーランド文学の偉大な経験

——ポーランドの亡命文学者たち——

クシシュトフ・ディブチャク
Krzysztof Dybciak

1981年12月13日、ポーランドはまたも新たな亡命者を世界に送り出した。「私は休みなく戦いを続ける、行動を続ける——ポーランドが自由となるその日まで」——前駐日ポーランド大使は亡命先のアメリカでそう言う。亡命とは何か、われわれ日本人にはなじみのない概念であろう。以下に紹介する論文の筆者の、ポジティブな亡命観をロシアの(ソ連の)亡命作家のその後の運命と合わせて考えてみるのも興味深いことと思う。亡命それ自体にも「ポーランドらしさ」があるのではなからうか。

論文には亡命文学者の名が80余も挙げられているが、個々の文学者の紹介はここでは省略させていただく。文中にある亡命文学者紹介の文献は、末尾に参考文献として原語で載せた。(訳者)

ポーランドの亡命者文化は、困難を伴いながらもしだいに国内の社会に知られていった。50年代のなかばから、国外に住む作家たちの無数の作品が現われてきた。作家の帰国にはふたつの道があった、すなわち、[外国への]帰化、あるいは死である。ただ、[1956年の]「10月」のあとの短い期間だけ、亡命中の生きている作家(たとえばゴンプロヴィチ)の作品が国内で出版されたことがある。帰国した作家たちにしても、決して亡命とのつながりを断ち切ったわけではなく、国外での出版さえ試みた人々がいる——スタニスワフ・マツキェヴィチとメルヒオール・ヴァンコヴィチに権力が手を焼いたのはそのためである。そうした厄介事はしばしば法廷でけりがつけられた。ポーランドのその時々権力にとって良い亡命者とは死者のことであった。死者であれば(検閲のもとにはあるが)選集出版の特典が与えられた。このようにしてレホン(ニューヨークのホテルで飛行機で自殺)が、ヴィエジンスキ(ロンドンで心筋梗塞)が、フラスコ(ヴィースバーデンでの早すぎる死)が国内の読者との対面を果たした。

最近数年の検閲外出版(西側に住む作家の作品)

はかつてのシニカルな慣習を打破した。しかしその領域はあまりに狭い。

ポーランド難民の文化が魅力にあふれた現象を呈しているのは、個々の作家たち、たとえば、ゴンプロヴィチ、ミウォシユ、ザモイスキ、トホルスキ、パヌフニク、イノツェンティ・M・ポヘンスキ……等々の数々のすばらしい世界的な作品のためだけではない。史上まれな社会的現象としてのこれらの作品の総体がわれわれを魅了するのだ。生き生きと躍動する文化、だが、その文化の創造者たち(そして研究者たち)は世界中に離散し、みずからの国家機構からは当然の支持さえ受けられなかった——台座のない銅像のように。「世界のポーランド」——ステファン・キェシレフスキはそう規定した。しかし、なんと異常な現象であろうか。それは国立の研究所もなしにみずからを維持し、国の境界と文明の境界を超えて生きつづけるのだ。

この広範な文化現象を把握するのは容易ではない。資料収集はむづかしく、何をもって亡命とするかの境界は揺れ動き、亡命と断定するのも簡単にはできない。たとえばムロジェク、国外に生活しながら国内で作品が出版される、かれを亡命作

家といえるのだろうか。あるいはトマシュ・スタリンスキ（すなわち政治小説作家としてのキェシ・ジュレフスキ）、ポーランドにしながらその作品は亡命者の出版所から出され、むしろ外国の読者によく知られている。これを亡命作家と呼べるのだろうか。いかに膨大な量の文献にあたってみてもそこから十分な結論を出しえないまま終わるのではなかろうか。ヤン・コヴァリク編『1939年9月以後の国外で出版されたポーランド語雑誌一覧』（KUL [ルブリン・カトリック大学] 出版所、1976年）¹⁾には4000近い数の雑誌名が集められている。

在外ポーランド人作家の人物像、グループ、動向を豊かに収めた集大成と言えるものには、ティモン・テルレツキ編集による2巻本『在外ポーランド人作家1940—1960』（ロンドン、1964年）²⁾と、マリア・ダニェレヴィチ＝ジュリンスカ著『亡命文学者概覧』（パリ、1978年）³⁾がある。

この小論では、概括的な説明に終始することなく、今までに個々の群島の個々の島々についてだけは知っていた読者の役に立つようにしなければならない。明白に見てとれるのは、国内文学の空白を補う亡命者文学の役割であろう。



チエスワフ・ミウォシユ（左）と談笑する
T・マソウ・イェツキ、連帯—編集主幹（中央）

国内文学の空白を補う亡命者文学

国内の作家たちがほんの時たま（行政機関の押しつける困難をそのたびに克服しながら）手がけることのできた問題、それを取り上げた著作群に目を向けてみよう。

国を離れた作家たちは国内の作家たちと比べて、民族の伝統に活気を与え、それを西側文化のありとあらゆる横糸に結びつけることがよりたやすくなった。かれらの功績の第1はポーランドの過去の記憶全体の救済と歴史の連続性の保持にある。とりわけ、「二国民の共和国」で創造された諸価値、「海と海との間の土地」の精神的一体性〔訳注1〕の継承は亡命作家たちの活躍の舞台であった。国民とは地理的あるいは行政的・国家的に区分けされた人間集団ではなく、自由な選択にもとづく文化的価値を中心に統一された共同体である——それが亡命作家たちに身近な国民概念であった、また現在もそうである。反国家主義による

愛国主義、祖国との精神的結合、それがミウォシユをしてリトアニアを讃えさせ、ヴィェジンスキには東ポドカルパチエを、ステンボフスキにはドニェストルの峡谷を、ウイセクには生まれ故郷のベスキド・シロンスクを讃えさせたのだ〔訳注2〕。文学作品や研究、回想記のほとんどは「共和国」の血管につながりを持っていた、それは優れた作家たちがその血管の生まれであったという理由からでもあるが、国内の文学ではそれほど自由に国境問題を取り上げられなかったためでもある。ハレツキ、クキェル、ミウォシユ、ヴィンツェンツらの歴史的著作やエッセーには、多民族連邦国家〔訳注3〕、あの寛容で名高い、さまざまな影響に門戸を開いた、東と西の真の懸け橋となるあの国への洞察が戻っていた。

国を去った人々の幾多の文章の中にあるのは、ポーランドの、あるいは中部ヨーロッパの呼びさます過去だけではなかった。のちに大西洋文明へと形を変える地中海文明、これもポーランド人作家に靈感を与えている。バランドフスキ〔訳注4〕

に匹敵する在外の文学者は、古代ギリシャ・ローマ文化を熱愛する翻訳家、エッセイストのイグナツィ・ヴィエニェフスキであろう。西側文明が生きて残ることへの信念を明晰な美しい文章で表明したのは、スタニスワフ・ヴィンツェツ、イエジ・ステンポフスキ、ティモン・テルレツキらであった。ヨーロッパの歴史の要となったさまざまな価値、あるいは劇的な急変は、ユゼフ・ヴィトリン、ヘリング＝グルジンスキ、コワコフスキらの論文、そしてバルニツキの小説のテーマとなっている。亡命作家たちがとりわけ重きを置いたのは、長い間ポーランド国内ではのびのびと語ることのできなかった問題であった。かれらは、キリスト教のこの上なく貴重な財産を、自由と民主主義の理念の意味を、安定した保守主義の効用を描いて見せた。

現代史の偉大な時代と並んで、痛みを覚えながらも熱い討論の対象となったのは、つい最近の歴史の諸事件であった。それが原因で亡命という現象が始まり、いまなお続いているのだ。国を離れた文学がポーランド現代史の証人となった。

ポーランド現代史の証人

詩人の追放とは、比較的最近になって発見された単純な機能である。誰が権力を握っているのか、誰が言葉を検閲による禁言のみならず、言葉の意味を取り替えることによって管理できるのかをそれは露わにする。(チェスワフ・ミウオシュ)

わが民族の現在の状況にとって決定的な意味を持つ事実は第2次世界大戦である。国内の文学にはそれをテーマとしたものがたいへん多く現われた。だが、たとえばソ連におけるポーランド人の運命、といった歴史的経験の広範な領域においては沈黙を守る——それが特徴であった。一方、国を去った人々の間に生まれた文学作品、回想記、歴史著述は戦争に関するすべてを語り、民族の記憶の空白を埋める。過去40年にわたって現われてきた数多くの優れた文学作品や回想記はポーランドの社会の悲劇に正義の光をあてる。その最初のひとつが、1942年にテルアビブで出版されたヴァンコヴィチの『コジェニェフスキ一家の物語』で

あった。上の世代に属する(戦前から有名な)ほかの作家たちもまた西側での散文集出版を試みた——たとえば、ヘルミナ・ナグレロヴァの連作のすべて(『カザフスタンの夜』が含まれる)、さらに、ベアタ・オベルティンスカ、ヴァツワフ・グルビンスキ、ユゼフ・チャプスキらがそうである。しかし芸術的・歴史的に最も価値ある作品をもたらしたのは、もっと若い世代、ほとんどが戦後に登場した作家たちであった。数多い翻訳のおかげでグスタフ・ヘリング＝グルジンスキの回想記は世界的な重みを得て、強制収容所文学の古典となった。良質の文学を代表する作家には、ルポルタージュのクサヴェル・ブルシンスキ、散文のマリアン・チュホノフスキやレオ・リプスキ、少し年上だがユゼフ・マツキェヴィチがいる。小説には、中でも特に若いヴウジョジエシュ・オドイエフスキの、国内の雑誌には断片だけが載った『すべてを覆い、すべてを隠す』がある。ドキュメント、あるいは歴史資料の性格を持つ著作で忘れてはならないのは、ザヴォドヌイ、マツキェヴィチ、シフィアニェヴィチ、ポフシュ＝シシユコ將軍のものがある。国内文学にも誇るものはある(とくに出版点数において)、けれども、戦争とあの悲惨事からの「脱出」をテーマとした作品となれば、亡命者たちのかの有名な幾巻もの散文を忘れるわけにはゆかない。タデウシュ・ノヴァコフスキ、ゾフィア・ロマノヴィチョヴァ、そしてヤヌシュ・ヤシェンスキ(ヤヌシュ・スタニスワフ・ポライ＝ビェルナツキ)をまずはじめに挙げるべきである。ヤシェンスキの小説『戦いに寄せて』についてオルギェルド・テルレツキは、それが西部ルートにの兵士たちに捧げられた数多くの小説のうち最も優れたものであると数週間前の『ジチュ・ワルシヤヴィ』紙に書いている——「『戦いに寄せて』は最良の戦争文学として世界中の図書館に取られるであろう。

すべての戦線における戦いと戦争の最終段階でのポーランド人たちの演じたドラマはまた、ヴィエジンスキやレホン、プロニェフスキ(彼も数年のあいだ亡命の身にあった)らの、魂を描きつづる詩作品の源泉ともなった。

亡命作家たちは、国内にあって亡命の身にあると同じように、比較的しばらくはポーランドの現在について発言ができた。

ポーランドの現在を語る

「われわれの」亡命者文学が「期待の文学」としてあるのは亡命者社会ではなく、ポーランドの国内である。そもそも、生き生きとした読者の反応や、あとに続く者もなく、空虚の中に文学が存在し、長らえるなどと信じられようか。……亡命者文学の存続には、国内文学の存続におけると同様に、変化にたいする期待と信念の要素が強くなる。そうでなくては どうしてゴンブロヴィチやミウォシュがポーランド語に寄せる信頼を説明できよう。束の間の拍手喝采を求められても、それは偉大な作家の狂しとはならない。遅すぎた評価の例は別にめづらしいものではなく、むしろごく普通のこと——ふたりにわかつていた。(マリア・ダニエレヴィチ＝ジェリンスカ)

国内の文学論議にはしばしば、本当のできごとをもとにした政治小説の不在をかこつ声が開く。この領域においても読者たちは、知らない事実、興味深いコメント、独白の見解を、たとえそれが西側で出版されたものだとしても手に入れたいと渴望している。チェスワフ・ミウォシュの『権力の獲得』が世界的ベストセラーの筆頭に上がっている、しかし、チェスワフ・ストラシエヴィチの『このとりの巣から来た旅人たち』やスタリンスキ＝キェシレフスキ(亡命文学という区分けのむつかしきについてははじめに述べておいた)の一連の小説、ピョートル・グジの著作、そしてイェジ・アンジェイエフスキの『上告』、これらはミウォシュの作品に少なくとも肩を並べうものである。ドキュメント、白伝といった性格をわりあいに持つのはワラスコ、グリーンベルグ、ティルマンドらの作品である。

時にはつらく、憂うつなめごと、しかしつねに変わることなく興味深い亡命者の暮らしぶりを描いたフロリアン・チャルニシェヴィチの『卑劣者の運命』とダスタ・モストヴィンのいくつかの小説は芸術的に成功をおさめた。

時事評論についても忘れるわけにはゆかない。ふつうそれは目の前の問題を扱いながら、当座の意味しか持たずに短期間で消えてゆく。祖国と、そして同時代の世界の運命を思うとめどない情熱

に満ちた論争は、決してつかの間ではない意味を持つ多くの発言をもたらした。いまこの時代の社会の葛藤が知識人たちをして、ミウォシュが50年代から続けているような、あるいはゴンブロヴィチの『日記』の多くのページに見られるような、そしてマツキエヴィチやミェロシェフスキの著作、ヴァンコヴィチ、ズビシェフスキ、コワコフスキ、ズィグムント・ノヴァコフスキ、ムロジエク、そのほか多くの時事評論のような上質の文章を書かされたのである。最も頑強な政治的敵対者たちでさえ、かれらの才能と知識は認めざるをえなかった。亡命者文学はポーランド文学の成長の重要な一過程をなしている。

ポーランド文学成長の一過程

歳月の流れとともにそれぞれの時代の違いは深まってゆく、にもかかわらず、いわゆる「大亡命」の時代 [1830年11月蜂起のあとの] にひとつのポーランド文学が存在したように、われわれも、いま、ひとつのポーランド文学を持っているように思える……時が示してくれよう、ポーランドで発表された作品も、ポーランド国外で発表された作品も、ひとしくわれわれの文学の常に変わらぬ宝の庫におさめられるであろうことを。(ユゼフ・ヴィトリン)

離散したポーランド人たちの間でわが国の叙情詩は大きくわけて2度、その成長を早められた。最初の15年間は詩的言語の変化の時期であった。束縛されていた言葉は、歴史的破局の時代に生きる個としての人間の在り方を最も繊細に表現する手段に、そして哲学的諸問題を考察する方法にその姿を変えた。すると、詩人の発言は哲学における推論と同じ重さを持つ方法となり、伝達の形式は冗長化され、言葉の暗号性をたいし不信が宣言されて隠喩の使用には慎重になった。こうした表現方法の確立は疑いなく英語詩との絶えざる接触に負うものである。戦後ポーランド詩の「第1成長期」において英語圏に住む詩人たちが最大の役割を果たしたことはなんら不思議ではない——ミウォシュはアメリカ、イヴァニェクはカナダ、スウコフスキと「メルクリウス・コンチネント」派

の若者たちはイギリスに住んでいた。

その後、現在までの20年間の「第2成長期」は窮極の問題への回帰であり、首尾一貫して形而上的・宗教的体験を表わす言語として叙情詩をとらえていた時期である。再びここでミウォシユの活動に目を向けてみると、その傍には、アレクサンデル・ヴァト、ヴィエジンスキ、ヴィトリン、さらに数人の詩人＝司祭たちのすばらしい創作活動がある。天分豊かな巨匠たち、詩人＝司祭たちが大挙して現われた——世界的にも独特であり例のない現象である。さらにそのほとんどが外国に住む作家たち（かれらすべてが政治的亡命者というわけではない）であったのだ——たとえば、ハプロフスキ、イフナトヴィチ、ミョンゼク、ヴィトヴィチのように。

物語散文で最初に偉大な芸術的試みをおこなったのは地球の反対側に追放された作家たちである——ゴンプロヴィチはアルゼンチン、バルニツキはメキシコ。自伝的小説が成功をおさめるようになったのは『イッシの谷』の出版以来ではなからうか。戦後ポーランド文学の重要な現象のひとつに、「作りごと」の没落に伴うノンフィクション散文の隆盛がある。この傾向はそれより早く、亡命者文学において大規模に現われている。国内にエッセイやその他すべての革新的形式が浸透するのは50年代なかばになってからのことである。1953年に出版されたゴンプロヴィチの『日記』は、すべての日記文学の作家たちにとっていまだに手の届かない目標として残されている。ゴンプロヴィチのすぐ傍にはアンジェイ・ポプコフスキがいる——彼の『ペンのスケッチ』では世界大戦時のフランスの挫折が分析されている。ヘリング＝グルジンスキの『夜の書いた日記』は最近10数年の世界の危機を描いている。日記文学の起源はアレクサンデル・ヴァトの『われらの時代』に求められる。

回想記は、重要と認められ、読むに値するものだけでも膨大な量にのぼり、その概要をざっと描いてみるのさえ不可能なほどである。文芸批評の名にふさわしい仕事を代表するのは、ティモン・テルレツキ、ヴィト・タルノフスキ、コンスタンティ・イエレンスキ、アダム・チュルニャフスキ、および〔1968年〕3月事件後の亡命者——ヤン・コット、ロマン・カルスト、M・ブロンスキ、ヤ

ニナ・カツツ＝ヘヴェストン、アリツィア・リシエツカ、ヴィトルド・ヴィルブシャラの批評家グループである。

ポーランド文学は昔から、視野の狭さと経験の不足がもたらす地方性を運命づけられていた。国内問題への関心の集中が国際舞台での出来事へ注意を向けることを困難にしていた。こうしたわが国の文学の弱点は世界中に散った亡命者たちのおかげできっぱりと克服された。もしかするとこれは、わが国の歴史上はじめて文学が普遍的経験を伝えた出来事なのかもしれない。

普遍的経験を伝える文学

ゴンプロヴィチやムロジエク、ミウォシユ、ヘルベルト、クキエラ、マリアン・ブランデイスを読むと、どこにいても私はいつものわが家にいるような、いかなる国境にも阻まれない魂の祖国にいるような気持を味わう。(ヴィト・タルノフスキ)

ポーランドの創作者たちは一度ならず遠く離れた世界の片隅に住まうことを余儀なくされたが、そこでかれらは自分たちの置かれている、特別に恵まれた立場に気がついた。かれらはポーランド文化の特質を他の民族の文化の特質に対置できたのだ。ヨーロッパ圏の外にいてさえもそれは可能であった。つらい経験はポーランド人たちに、醒めた、冷たいものの見方を教え、かれらが生活することになった環境の多様さが比較によるものの学び方をもたらした。さまざまな個人的ドラマが非凡な文化的効果として実を結んだ。なんと見事な文学地理なのだろう。ゴンプロヴィチのアルゼンチン、戦時流刑囚たちの極北の地、ミウォシユのカリフォルニア、アンジェイ・フチュクのオーストラリア、ロンドン・センターのあるイギリス、ヘリング＝グルジンスキのナポリ、リブスキ、フラスコのイスラエル、ユゼフ・ウォボドフスキのスペイン、ストラシェヴィチのモンテヴィデオ、レホンのニューヨーク。遠い国々での長年にわたる潜在の成果はパスポートに押されたスタンプの数だけではない。ポーランドの亡命知識人たちは自分たちが住むことになったさまざまな社会と張り詰めた対話をおこなったのだ。それはポーラン

ド人としての意識にとって二重の意味で利益をもたらした——世界についての知識が増し、同時に「ポーランドらしさ」の本質をよりよく理解できるようになったのである。より一般的な観点からの効用にもふたつの面があった——世界の文化の成果をよりたやすくポーランドに伝え、同時にポーランド人の業績を外国の受け手（ますますその数は減りつつある）に知らせる道ができたのだ。

亡命者の運命は気楽なものではない、しかし、あらゆる生のあり方が良い面と悪い面をあわせ持つのは歴史的存在の特質でもある。最近のポーランドの歴史が生み出した悲しむべき罅はわが民族にチャンスを与えた。そのチャンスはポーランドは一挙にわがものとしたのだ。今日、われわれは文字通り全地球規模の経験を手の中にしている。この宝の庫からわれわれはわれわれ自身のために取り出せる、また他の人々とその宝を分かち合うこともできる。苦しみは認識の母であるという。苦しみを求める必要はない——悲しいかな、それは容易に犠牲者を見つけ出す——しかし、苦しみを訪ずれた時、それをわがものとする能力がなくてはならないのだ。

訳注1： 1569年、ポーランド王国議会とリトアニア大公国議会がルブリンで同時に召集され、そこで、ポーランド、リトアニア両国の独自性を全面的に認めるあらたな合同の形態が決定された（ルブリンの合同）。ポーランド・リトアニア両国民を統合し、シュラフタ（上族）の自由選挙により君主を選出する統治形態（1772年の第1次ポーランド分割まで約200年間つづく）を「二国民の共和国」、あるいは単に「共和国」と呼ぶ。当時のポーランドは、バルチック海への出口、グダンスクから黒海への出口、モルダヴィアのビャウイグルドまでの「海と海との間の土地」を版図としていた。「海と海との間の土地」に住む人々は自由に往来し、商業、学問、芸術が栄えた。16世紀はコペルニクスの地動説（1543年）に代表されるように、ポーランド文化の「黄金の世紀」であり、民主主義（シュラフタ民主主義）の黄金時代であった。

訳注2： リトアニアは現在リトアニア共和国（ソ連邦）、東ポドカルパチエはウクライナとポーランドの国境地帯、ドニエストルもカルパチア

山脈から発してウクライナ共和国内を流れ、黒海にそそぐ川、ベスキド・シロンスクはチェコとポーランドの国境地帯。

訳注3： 「ルブリンの合同」によって成立した国家は多民族国家でもあった——ポーランド人は40%、ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人が20%、リトアニア人が10数%、ドイツ人が10%少々、ユダヤ人は約5%、残りはラトビア人、アルメニア人、スコットランド人など、商業利益を求めてやって来た人々とその他少数民族。

訳注4： ヤン・パランドフスキ（1895年生）、散文家、エッセイスト、翻訳家。古代ギリシャ文化に造詣が深く、その作風はヨーロッパ人文主義の伝統を受け継ぐ。

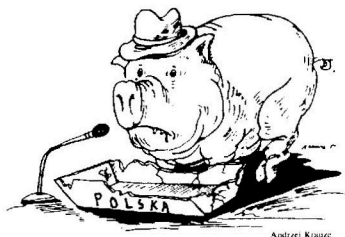
参考文献： 1) Jan Kowalik, "Bibliografia czasopism polskich wydanych poza krajem od września 1939r." Wydawnictwo KUL 1976

2) Tymon Terlecki, "Literatura polska na Obczyźnie 1940-1960" Londyn 1964

3) Maria Danilewicz-Zielińska, "Szkice o literaturze emigracyjnej" Paryż 1978

Krzysztof Dybciak, "Wielkie doświadczenie Literatury polskiej", Tygodnik "Solidarność" nr 15 (10. VII. 1981)

〔『週刊「連帯」』第15号、1981年7月10日付訳：篠崎誠一〕





ポーランドは豊かな国のはず

アンジェイ・クヴィアスタ

〔編集部注〕以下に紹介するアンジェイ・クヴィアスタの文章は1981年10月に書かれ、P P S〔ポーランド社会党〕在外組織発行の『ロボトニク』第1号（通巻8364号）に発表された。81年12月13日以降状況は変化したが、ここに指摘されている問題はいまなお重要性を持つものと思われる。訳出にはミロスワフ・ホエツキ編集の『コンタクト』創刊号（1982年4月号）に転載されたテキストを利用した。

なおアンジェイ・クヴィアスタは、1976年につくられた自由労組（WZ Z）設立委員会の発起人であり、80年8月には工場開ストライキ委員会（MK S）幹部会員、その後は「連帯」全国調整委員会副議長、「連帯」グダンスク地方本部幹部会員をつとめる。

国民1人当りの豚の飼育数においてポーランドは世界で西ドイツに次ぐ地位を伝統的に占めている。1975年には西ドイツを抜いて世界第1位の豚飼育国にさえた。ところがその同じ年、われわれの記憶によれば、豚肉は店頭から消えていた。1976年（配給切符制が導入された年）、ポーランドは3億1100万キログラム——国民1人当り約9キログラムになる——の砂糖を輸出した（世界砂糖協議会の資料はルーブル圏内部の輸出を考慮していない）。

わが国の可能性を1978年版統計年鑑から引き出してみよう。基礎的な比較のためにポーランド人1人当りの各種財の生産高と、ヨーロッパ人1人当りのそれとを取り上げる。ヨーロッパ人1人当りの生産高を1とするとポーランド人1人当りは次のようになる。

石炭	3.65	(+265%)
電力	0.69	(-31%)
化学肥料	1.40	(+40%)
セメント	1.02	(+2%)
肉	1.18	(+18%)

砂糖 1.27 (+27%)

（このような表はもちろん統計年鑑に出ているわけではない。これらの数字はいろいろな表から私が算出したものである。政府発表の大部分がそうであるように、これら資料もニセの数字の可能性もある）。

この表によると、市場に物不足が起こる理由が（電力を除いて）ないことになる。ヨーロッパのどこかの国へ行ったことのある人、あるいはそこに知り合いを持つ人ならば、わが国とその国との生活状態の比較ができよう。表によればわれわれの方が平均して高い水準にある——肉は20%近く、砂糖は30%、そして農業生産高を決定する化学肥料は40%も、それぞれわれわれの方が上回っている。建築のテンポを決定するセメントについても、わずか2%ではあるがわれわれが上回っている。それなのになぜわれわれは住宅を手に入れるまで10年から15年も待たなくてはならないのか。よその国では肉が店にあふれているのに、なぜわれわれのところでは配給切符なのか。肥料生産がヨーロッパ水準を40%も上回っていて、なぜわれわれ

は穀物を輸入しなければならないのか。こうした問いかけにたいする答えは、どうやら経済学者たちの手に余るものと見える。私立探偵でも雇った方が手っとりばやいのかも知れないが……。

問いかけにたいして誠実な答えが得られないとすると、改革だ、改革だといくら言ったところでまじめな話にはならない。

もし可能性と現実とのこのような乖離が中央の馬鹿気た数々の計画によって生み出されているのならば、それらのひとつひとつを明らかにし、つぎにはこうした乖離を将来の経済モデルから排除してゆくべきである。

もし経済危機を招いたのがワルシャワ条約の負担であり、「社会主義共同体」に所属するための負担（軍備、MSW、ZOMO、ORMO、RWPG、等々〔訳注参照〕）であるならば、それらの費用もわれわれは知らなければならない。

「共同」の資本投下費用については入念に隠されているが、それを知る手だてがまったくないわけではない。たとえば『ベトロボルチック』会社はそれぞれの国が均等に採掘権を持つという原則にもとづいて海底油田を買い取った。東ドイツとソ連はそれぞれ3分の1ずつ費用を負担し（もちろんルーブルで）、ポーランドも同じく3分の1を負担してベルギー沖の海底を手に入れた、がポーランドだけはドル建てであった。ポーランドがソ連に売る船舶はルーブルで支払われる。船舶の評価額は世界における同クラスの船舶の平均価格にもとづきドルからルーブルに換算して決定されるが、1971年の資料によるとわれわれが手にする見返りはその船の価値のほぼ23%になっている。価格にはルーブル建てで売られる船に装備するさまざまな器械（われわれがドルで買入れたもの）の額も含まれている。これが、われわれが両側からの借金に首が回らなくなった主たる原因ではないか——この問いかけは当然であろう。こうした不当な取り引きは今後もつづくのか、あらたに暴露された事実は数多くあるが、このような取り引きはどれくらいの規模でおこなわれているのか——われわれは返答を得るべきである。

「再生」について、改革についていろいろと言われる、しかしこうした問いかけには何ひとつ答えがない、あるのは政府がつぎからつぎへと繰り返すゴマカシばかり。「連帯」は政府がそうした

問いかけには答えを拒むものとひとり納得して、その問いかけ自体を自制している、それも似たようなゴマカシである。

機密は厳重に守られる、それは当然だ。しかしわれわれが知りたいのは原爆の数とかロケット（われわれの金でつくられるのだが）の技術資料とかではなく、どのくらいの費用がかかるのか、われわれの負担はどの程度なのかということなのだ。もしソ連との貿易が採算の合わないものならば、そこからどれほどの損失を蒙っているのかをわれわれは知らねばならない。そういった資料もなしには改革の目途は立ちほしない。将来の経済モデルはそうした強制された支出をカバーするだけでなく、われわれの必要を満たす保障を持つべきである。軍備とその他軍事関連費用は国家予算の6%を占める——それが経済の計画に添ったものだとわれわれが信じたところで、現実の負担は、たとえどれほど賢明な改革があろうともわが国の経済を崩壊させる。こうした費用を社会から隠しておくことを任務とする構造、そしてそのつじつまを合わせる手段は、私が思うに、隠された費用と同等の損失をもたらす。危機から脱出するためにはふたつの状況をはっきりと規定できなければならない。つまり、こうありたいとわれわれが望んでいる状況と、われわれが現在おかれている状況である。その規定は改革の指針となる、が、もしわれわれがいま置かれている場所を正確に知らないとすればそれは不可能なことである。

現在おこなわれている改革の議論を聞いていると、われわれは繁栄という空っぽの樽を、はたしてこれに底があるものやら知りもせずに、茶碗とかコップで一杯にしようとしているような気がしてくる。公式の資料によれば、わが国は食肉生産においてヨーロッパの先頭に立ち、肉の生産ではどんじりにあるという。なのに、卵はなくて卵はある。そこで思い出すのは1978年のことである。その年の収穫は前年よりもはるかに良かった、だが検閲はその報道を禁じた。なぜ？ もっと多くの食糧を輸出に回せるようにか、それとも値上げをするためか。値上げはなかった、しかし食糧は不足した。こうして事実を列挙してみれば、政府のやることすべてに不信を感じるのには当然であろう。政府とは役人の集まりである、その役人とは社会の人々が一定期間の職務を委ねた人間である

——となると不信はなおのこと強まる。そういった職務遂行のためにかれらは必要な権限を付与され、必要なだけの助手を持ち、法律の保護を受け、行政命令を出す。また、かれらは社会の負担でしかるべく、少なからぬ額の俸給を受ける。役人たちの職務の遂行具合をみんなが判定すべきである——かれらの俸給を分担させられ、役人たちの管理によってみずからの自由の制限に同意しているみんなが評価を下すべきである。具体的な評価方法についてはここでは触れずにおくが、大臣たちの出した報告にもとづいて国会議員が評価を下す、そういった方法もあろう。ただ、基本となる評価は市民の大多数が納得できるものであるべきだ。そのためには評価基準の設定が不可欠である。だが、改革の新しい計画をつくり出そうとしている今日、必要なのは政府の行動を総体的に評価することである。われわれは大臣のひとりひとりをしじゅう見張っているわけにはいかないし、前年の業績との比較を原則とするかれらの説明をうのみにするわけにもいかない。「破局を孕んだ年は今年ではない、去年だ。破局を早める計画が認可されたのは75年なのだから、そのような経済政策が半破局だか、4分の1破局だかを引っぱり出したところで、それはわれわれの責任ではない」——こうして大臣たちは現在の状況との比較でほっとした気分を味わう。経済の目標になりうるのは完全な配給制ではなく、自由な市場において供給を完全に保障することである。経済学の教授連によると、わが国では資源をきちんと管理しないことには、われわれが腹いっぱい食べることも、行列やソデの下なしに買い物することも、すべての人々が自分の家を持つことも、仕事の疲れをいやし、休息することも不可能なのだそう。もちろん嘘だ。なにしろわれわれの国はヨーロッパで最も豊かな国である、いや、ともかくも豊かな国のはずなのだ。食糧供給の問題は現在どのように説明されているのだろう。農業省のある局長の示す資料によれば、われわれは1850万頭の豚と1150万頭の牛（これには580万頭の雌牛が含まれる）を飼育していることになっている。1977年と比較してそれは豚で30万頭、牛で27万頭の減になる。その減少分を考慮しても、国民1人当り1ヵ月に骨つき肉8.2キログラムずつが割り当てられる。豚肉は1人1ヵ月4.8キロ、ハムは1.06キロ、ロース肉

は0.86キロ。牛肉は3.4キログラムである。380万頭の雌牛がいれば平均の（公式資料による）ミルクの量は年4000リットルであり、それにふくまれる平均的な量（3.9%）の脂肪をわれわれは受け取れるはずである。つまり、脂肪含有量2%の「国営」ミルクを1人当り0.81リットル消費し、生クリームを分離したあとでもわれわれは1年に12.6キログラムの脂肪を、すなわち、1ヵ月に1.05キログラムのバターを手にするはずである。さらに、脂肪分離前の生乳が1人当り300リットルまだ残る。そこから1人当り1ヵ月に2キログラムのチーズがつくれる。現実的に考えてみても、1人当りミルクは1日0.4リットル、バターは1ヵ月1.5キロ、脱脂チーズ1キロ、脂肪入りチーズ2キロは少なくとも手に入るはずである。

なぜこの通りにいかないのか。どうしてバターや肉やチーズが不足しているのか。これは政府につきつけるべき具体的な質問である。なぜこうも物不足なのか。行政機関の間違った政策が畜産をだめにしてしていることは明白だ。政府は採算のとれない政策を実施している。すさまじい浪費というべきだ。そこに食糧危機の原因があるのならば、どのような行政命令がそのような事態を招いたのか、誰がその命令を出したのかをわれわれは知りたい。これらサボターージュをおこなった者たちの訴訟にも立ち会いたいものだ。しかし行政の愚かさどサボターージュだけではすべてを説明できない。たとえば、豚はあまり長く飼育をつづけるわけにはいかない。屠殺するのにいちばん有利な豚の体重は85～130キログラムであり、そのためには6～9ヵ月間の飼育が適当なのである。実際、豚は200キロを超えてもその体重を維持するだけのためにさらに餌を与えなければならない。それは単なる浪費である。脂身の増加は少々あるものかなりの飼料を無駄にする。豚の体重が標準を超えてもなお農民たちが肥育をつづけるのは畜産政策にその原因があるというのが本当ならば、われわれは圧倒的に脂身過多の豚肉を買っているはずである。なぜなら、180キロ以上の豚にはもはや肉はつかず、増えるのは脂身だけなのだから。にもかかわらずラードは不足している。なぜなのか？ さらに奇妙なことに、過去の誤りや歪曲が再生によってかわられた時期にはいつも、豚肉は不足し、かたやラードや脂身はあるといった事態がしばしば

起こった。豚肉輸出がその原因であった。なぜなら、わが国の輸出相手が脂身の少ない肉を好んだからである。いまだき脂身愛好家など見つかるものか。

再生は1年つづいている、この一年の間にわれわれは占領時代を再び生みだした——すべてに配給制が導入されたのだ。その間、国家行政機関は肉の質を向上させるための施策を何ひとつしなかった。豚の屠殺に有利なのが飼育6ヵ月とすれば、もし行政をおこなう者たちに賢明な(専門的な)構想があり、飼料の蓄えがあったならば、この1年で豚肉の生産は30%増加できたはずだ。

私は、飼料の蓄えや生産高についての資料を自由に扱える立場にない。わかっているのは、ポーランドは何世紀の間もありあまる穀物と多すぎるほどのじゃがいもをかかえていたという事実である。われわれは良い気候と肥沃な大地に恵まれている。肥料の消費はベルギーやオランダや西ドイ

ツに比べればかなり少ない、しかしヨーロッパの平均よりは40%も多いのだ。PGR〔国営農場〕とSKR〔農業協同組合〕は、実際には財政的損失を出しながらではあるものの、生産はしている。にもかかわらずわれわれは穀物と飼料を輸入せざるをえないのだ。

1981年10月

訳注：MSWは内務省、ZOMOは警察機動隊、ORMOは警察協力義勇隊、いずれも市民の弾圧に力をふるう機関。RWPGは経済相互援助会議COMECONのこと。

Andrzej Gwiazda, "Polska powinna być
zamożnym krajem" Październik 1981

〔訳：篠崎誠一〕

実録 子どもの抵抗 (1)

軍人が中学校の教室へやってきた。なぜ戦時体制宣言や軍政が必要なのか演説するためだ。

あるクラスでは、軍人が入ってみると、生徒全員が壁に向かって両手をあげて立っていた。

あるクラスでは、演説のあいだじゅう生徒たちはセキやクシャミをしつづけ、軍人の話はほとんど聞こえなかった。

あるクラスでは、教室に来た軍人に向かって生徒たちがえんえん2時間拍手しつづけ、軍人は結局何も言えなかった。

実録 子どもの抵抗 (2)

幼稚園の5歳ほどの男の子たちも、抵抗運動の積極的な参加者である。

彼らは、昼の11時に連れだって街へ出ていく。

街角のあちこちには警官が立っている。子どもたちはそれぞれ受け持ちと定めた警官のそばへ寄り行って声をかける。

「Dzień dobry! (こんにちは)」

警官が返事をしなければ、彼らはその警官はポーランド語がわからないのだと解釈する。

そうなれば、あとはこう叫びながら走って逃げるだけだ。

「やーい、露助! 露助!」

まじめな話

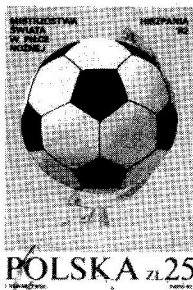
ポーランドのサッカー・チームがスペインのワールドカップで3位になった。これには軍政の力が大きくあずかっている。

1 軍政下で辛い思いをしている国民の期待と希望を背負っていた。

2 勝ち進めばそれだけ長いこと西側に滞在してられる。

3 良いプレーを見せれば、亡命して西側のチームと契約するときの条件が良くなる。

〔訳：鳥井摩利〕



地底の闘い

シロンスク 1981年12月(下)

フェリクス・シフィエトリク編

シロンスクからの情報はZOMOの襲撃にそなえる準備と鎮圧行動そのものをいちばん多く語っている。ストライキの組織化や、占拠した工場内で何がおこなわれたかを示す材料はあまりない。手元に届いた情報によれば、ストライキの現場に司祭がやって来て、ミサをおこない、ざんげに耳を傾け、聖餐式をしている。ボルコヴィツェ鉱山では坑夫たちが祭壇をこしらえ、ポーランド国旗をふたつに引裂き、その白い方の半分で祭壇を覆った。カトヴィツェ製鉄所ではミサの時に十字架が聖別され、翌日それは正門に立てられた。各鉱山は飾りつけがされ(ヴェク炭坑の入口にはシーツに描かれた聖母像がかけられた)、坑夫たちは聖歌と愛国歌をうたった。

ジェモヴィト炭坑では――

「全体集会は日に2度あった。……この状況が長引くとわかると人々は板を運びこみそれを寝床にした。ある者たちは黒い発泡コンクリートで聖バルバラ〔鉱山の守護神〕の像やカプリチカ〔イエス・キリストや聖母の像をまつる祠のようなもの、ポーランドの町や村の道端によく見られる〕を刻んだ」。

次のような情報もある。各職場では秩序と規律が支配し、労働者たちは自分たちこそ職場の主人だと感じ、できる限りストライキのために社会が苦しまないで済むよう心を配っていた。ヤストシェンピェ炭坑のMK Sは、火力発電所が石炭を確保できるように炭坑の一部は操業をつづけると決議している。

カトヴィツェ製鉄所では――

「高炉の保安対策に特別班が指名された。高炉の火は消え、鋼鉄の隔壁はだいに冷えてゆき、ひび割れのおそれがあった。労働者たちは危険を

避けるためにあらゆる手段を講じた。高炉の冷却水はゴウォヌク市とドンプロヴァ・グルニチャ市に最近建設された団地の地域暖房に使われていたのだ」(資料「カトヴィツェ製鉄所 I」)。

ボルコヴィツェ鉱山からの情報には次のようにある――

「われわれはZOMOが狼藉の限りを尽した現場に入った。破壊の跡はすさまじいばかりだった。それを見ると坑夫たちは泣きながら身を屈めて壊され投げ散らかされている道具を拾っては元の場所に戻そうとした」。

シロンスク地方の事件に直接かかわったり、それを目撃した人々の話にはZOMOのふるまいに多くのスペースがきかされている。

「かれらは檻から出された獣のように落ち着きなくふるまっていた。ZOMOが使われたのはほんの短い間だけだった。荒し回るだけ荒し回るとすぐに一か所に集められてトラックに押し込まれ、錠が下ろされた。私はそのうちのひとりを目撃に見た。その姿はいまも目に焼きついている。黒いツナギを着て、鋏を打った手袋をはめ、肩と胸にも鋏があって、シールドの付いたヘルメットをかぶっていた。片手に盾、もう一方の手に棍棒を持ち、すごい大柄でまっ黒な髭面、目をむいて何か意味不明の叫び声を上げていた。ポーランド人ではないと思ったほどだ」(資料「ボルコヴィツェ鉱山 II」)。

「かれらの顔を見ました。ZOMOたちの表情には思慮深さは毛ほどもなく、うつろで思い上がりばかりが目立ちました。かれらは棍棒をもってあそびながら坑夫たちを眺めていた。兵士たちの方はとまどっていました。司祭の姿を見ると目を伏

せるのです」（ポルコヴィツェ鉱山の司祭の話から）。

「『連帯』職場委員会の事務室をすっかり荒し回るとZOMOはつきにおもてにとび出し、そこにいた人々を手当りしたい棍棒で殴りつけ、追い立て、一か所に集めた。女性たちも、スト参加者の妻や母たちまでが殴られた。「勝利の日までストライキを」と書かれた横断幕が引裂かれ、踏みにじられ、焼きすてられた。やがて、捕えた数十人の人々を連れてZOMOは引上げていった」（資料「カトヴィツェ製鉄所Ⅱ」）。

「ZOMOは作戦がうまくいかなかった腹いせに50人ほどの人々を捕え、さらに、見せしめのために製鉄所の外にいた人々に暴力をふるった。外には食糧の差入れにやって来ていた坑夫たちの妻や母もいた」（資料「カトヴィツェ製鉄所Ⅱ」）。

ストライキ参加者たち（医師もいた）は、作戦に加わったZOMOたちが麻薬の影響を受けていたと言っている。病院の医師たちは、麻酔のショックで死亡したZOMOの症例を発表している。症状から、かれは化学薬品の影響下にあったものと判断される。それはおそらく麻薬であろう、あるいは鎮圧行動の際の毒ガスの影響もありうる。

最も残虐なふるまいをしたのはヴエク炭坑を襲ったZOMOであった。

「火器による一斉射撃をおえると警官たちはけがをして動けない坑夫たちをさらに責めさいなんだ。炭坑から出てゆく救急車はZOMOに止められ（車はけがをした坑夫を満載していた）、けが人は雪の上にほおり出された。救急車は空のまま現場を離れるよう命令された」（資料「ヴエク炭坑Ⅲ」）。

話をしてくれた医師はそこでいったん言葉をきり、こう言う。「よく聞いてくれ、覚えておいてほしい、そしてみんなに話してくれ」。医師たちとZOMOとの間でけが人をめぐって争いが起こった。「ZOMOは医師たちをけが人のそばに寄せつけまいとし、坑夫たちにとどめをさそうとしていた。医療班もまた激しく戦った、しかし手当てすべき患者は死体になっていた……。腹に銃弾を受けた2人は、もしすぐに手当されていれば十中八九たすかっただろうに」（地下通信「シロンスク第4次蜂起」）。

「警官は情容軟くな坑夫たちを扱う。担架の上のけが人を殴ったという話もある」（資料「ヴエク炭坑」）。

「棍棒で頭を殴られたある人は血を流しながら犬のように足蹴にされた。2度目の襲撃でZOMOはあらゆる坑道に、さらに地上の建物の窓を破って、催涙ガス弾を撃ち込んだ」（資料「ヴエク炭坑Ⅳ」）。

「一斉射撃だというのはけが人の様子でわかる。ある医師が手術した負傷者は指と腹と大腿骨に3発の銃弾を受けていた。弾丸はやく15センチの間隔で右から左へ貫通していた。数メートルの距離から撃たれたものだ」（ヴエク炭坑の医師の話から）。

ZOMOはほかのストライキを鎮圧する際にも投降してくる労働者を責め、苦しめた。抵抗らしい抵抗がなかった所でもZOMOのふるまいに変わりりはなかった。どこでも「ひどく殴られた」。1982年1月8日、炭坑の隣近くでストライキ中に殺された労働者の死体が発見された（ロズバルク炭坑）。炭坑の近くでは女性や子供までが殴られ、そのうち1人が殺された（ゾフィユフカ炭坑）。ヤストシェンビェ市で最後まで持ちこたえていたマニフェスト・リブツォヴィ炭坑は火器の使用により陥落した。坑夫が2人死に、4～5人が銃弾を受け負傷した（リブニツキ炭坑地帯の1住民の話）。マニフェスト・リブツォヴィ炭坑のストライキが打ち破られた際、労働者たちはさんざんに打ちのめされた。負傷者の大部分が脊椎に後遺症を残し、頭に重傷を負っている（ヤストシェンビェ市の1住民の話）。

各鉱山、製鉄所は戦車に包囲された。ZOMOが到着した。鎮圧に近いことを示す合図だった。ストライキに入っている個々の職場を切り離すために通信が断たれた。ポルコヴィツェ炭坑行の通勤バスが来なくなった。ヴエク炭坑近辺を通る環状線は封鎖され、列車は駅に止まらざり、81年12月17日をもってドンプロヴァ・グルニチャとカトヴィツェ製鉄所間の市電とバスの運行が停止された。

カトヴィツェ製鉄所への差入れの包みを横どりすることからZOMOは行動を開始した。製鉄所へ食糧を持ってやって来た農民たちが途中で逮捕

された。インスタル製鉄所の労働者2人が、ストライキ参加者へスープを差入れたとして逮捕された。

ストライキをしている工場や鉱山の周囲には家族が、子供づれの婦人が多勢あつまっていた。ボルコヴィツェ鉱山では――

「朝の8時から、数10人、やがて数百人となった子供づれの婦人たちが坑口へ詰めかけてきた。はじめのうち警察は彼女らの行手を阻み、思いどまらせようとしていた。が、やがて放水をはじめた。それは止むことなくつづいた。女性や子供にもペタルダとガス弾が撃ち込まれた」。

ボルコヴィツェ鉱山が鎮圧されたあと、ストライキを中止した坑夫たちや市民が集まっていた市の広場をZOMOが取囲んだ。ペタルダとガス弾が投げ込まれた。まわりの建物から植木針やなべがZOMOに投げつけられた。

81年12月16日、午前10時ごろ、ヴェク炭坑のまわりには500人ほどの人が集まっていた。ストライキ参加者に最後通牒が突きつけられた――1時間以内に構内を立ち退け。群衆は正門の内側にバリケードを築いて立てこもる坑夫たちのために歌った――「神よ、ポーランドに」、そして「神は守りたまう」。

襲撃がはじまった。

「……婦人たちが通りをふさぐ。何人かが戦車のキャタピラめがけて身を投げる。戦車は止まるが、すぐに動き出す。今度は断固として婦人たちの封鎖線を突破しようとする。地面に横たわる婦人たちは放水銃に撃たれ戦車の前から流される。婦人たちは恐れる気配もなく戦車の砲口にロザリオをかける」。

ヴェク炭坑の周囲に集まった人々の大胆不敵な行動のおかげでZOMOと警察は2つの戦線で戦うはめになる。戦間に近隣の団地の住人たちも加わる。

「炭坑への正面攻撃開始。炭坑構内に大量のガス弾が撃ちこまれる。戦車がボイラー室わきのゲートと石炭積込用の引込線のゲートを打ち破る。経理部の倉庫が全壊。壁の破れ目から盾とヘルメット、棍棒、催涙ガス弾で武装した警官が無数にだれだれ。戦車が一斉射撃を開始（無差別射撃だ）。機関銃のはざる音と散発的な銃声が聞こえる。ひっきりなしに投げこまれるガス弾にすべてが煙って見える。

……支援にかけつけたあるグループが襲撃部隊に投石をはじめた。女性たちはとりわけ決然としている、まったくおびえない。彼女らはガス弾も警察の解散命令も恐れぬ。素手でガス弾を拾い上げては治安部隊に投げ返したり、どぶに捨てたりしている。……ストライキを支援する命知らずの人々の一隊が、炭坑の柵沿いに走るせまい道を遮断して戦車の動きを封じようとして決意する。かれらは手近にあった簡易宿泊用の車をころがしてくると、それを道幅いっぱい置き、横倒しにする。警察の攻撃がかれらに向けられる。人々は団地の奥へ逃げる。……すぐにかれらはまたグループをつくる」（資料「ヴェク炭坑 I」）。

ヴェク炭坑とボルコヴィツェ鉱山の戦いは、われわれの知る限り、ZOMOの襲撃にたいして積極的な防衛をおこなった唯一の例である（マニフェスト・リプツォヴィ炭坑とゾフィユフカ炭坑でも労働者が抵抗に立ち上がったという情報も聞いているが）。

「真っ赤に熱せられた鉄の棒がZOMOのヘルメットを突き通し、まるでろうにでも刺されるように頭を貫いた。こうして襲撃者2名が殺された」（資料「ヴェク炭坑 II」）。

「最初に食堂に押し入ったZOMOにコックがスープを溶かかけた。するとほかの誰かがさらに消火器（マイナス70度の急速冷却剤だ）を吹きつけた。ZOMOはつららになった」（資料「ボルコヴィツェ鉱山 III」）。

「坑夫4人の特別班ができました。2人が防水布でガス弾を受けとめるとあとの2人がそれをすばやく投げ返すのです。ほかの人たちはひっきりなしにポンプで水をくみ上げてはガスを液化しようとしていました。高揚した、異様な雰囲気でした。「われわれの誇りを見せてやるう」――そんな声も聞きました」（ボルコヴィツェ鉱山の司祭の話から）。

ヴェク炭坑と同じくボルコヴィツェ鉱山でも最初の襲撃はねえ返された。ボルコヴィツェのある坑夫が語る――

「まだもう少しは持ちこたえられた。だがけが人がいた。ペタルダで仲間の若いのが顔にやけどをしたんだ。救護班を組織しなけりゃならなかった」。



上：クラクフでの市街戦(5・13) 下左：ジェモヴィト炭坑の坑夫 下右：ワルシャワのデモ(5・13)

同じくポルコヴィツェ鉱山から——

「MO〔警察〕の大佐と交渉するために司祭が派遣された。着がえの時間として1時間が与えられた。われわれは外に出た。坑夫の一部は引返して坑内に降りようとした。われわれは2つのグループに分裂した。私はこれ以上抵抗しても意味がないと思っていた。おそらく私は正しかったと思う。あれ以上つづけてもシロンスクと同じ結果になったろう。今回は負けだ。しかしこれで終わったわけではない。ただ、残念なのはまたしても労働者が首を差し出さねばならなかったことだ。われわれはあんなにも長く戦った、それというのも、ルブリンから数千人の援軍が来ると聞かされたからだ」。

大部分の場所でストライキ参加者たちは職場を明け渡す前に軍と交渉をおこない、安全に帰宅できるように保障せよと要求した。各地からの情報の

ほとんどが触れているが、その保障は出されたものの、ZOMOは外へ出てゆく労働者にたいして再三襲撃をくり返した。ポルコヴィツェ鉱山でも同じだった——

「労働者たちが身を寄せ合って外へ出てゆくと、ZOMOは放水銃でかれらを散りじりにさせようとしてました。いちばん苦しんだのが先頭にいた人たちです。かれらは全身びしょぬれになりました。零下15度の寒さですよ。近くに住む人たちがかれらに自分の服を差し出してくれました」(ポルコヴィツェ鉱山の司祭の話から)。

ZOMOは軍のした約束を破った。受け身の抵抗を決めた労働者たちのところでさえそうだった。カトヴィツェ製鉄所では——

「ストライキ参加者は軍にたいして、労働者が安全に帰宅できる保障を要求した。保障は得られた。午後3時30分、10台の戦車とやく3千人のZOMOが製鉄所構内に突入した。ストライキ労働

者は追い立てられ……情容赦なく棍棒と拳がふりかかった。労働者たちは、棍棒をふり上げて待ちかまえているZOMOの列の間を通らねばならなかった。最後の日にはストライキ参加者の数が2千人におよんだ。そのうちやく3分の1が留置場に(?)時まで〔原文脱落〕入れられていた(資料「カトヴィツェ製鉄所Ⅱ」)。

「戦車の背後にはZOMOがいた。かれらはわれわれを突きとばし、手当りしたい棍棒で殴りつけながら圧延工場に突入してきた。軍が安全を保障するまでわれわれは工場を離れるつもりはなかった。ポーランド陸軍の大佐がやってきた。『門の外ではどうなる?』と労働者たちが尋ねた。『心配はいらない、何も危険はない』と大佐。……さきに出たグループはひとりずつZOMOによって仲間から引き離され、殴られ、逮捕された(旗を持った人々はとくに目をつけられた)。われわれは少佐の先導で車道の左側を歩きゲートの外の陸橋まで行った。ゴウォスクの団地内に入るとわれわれは国歌を歌いだした(資料「カトヴィツェ製鉄所Ⅰ」)。

ヴエク炭坑における交渉では、坑夫たちに捕えられた人質がかけひきの手段に使われた(人質というのは、ある情報によれば戦車隊員とあり、ほかの情報ではZOMOとされる)。坑夫たちは、豎坑につき落ちてやるとおどしながらかれらの尋問をつづけた。伝えられる話では、かれらは慈悲を請い、もう労働者には手をふり上げないと誓ったという(資料「ヴエク炭坑Ⅲ」)。

「交渉がつづく。坑夫たちは、ZOMOがもし発砲したら人質を殺すとおどした。坑夫たちが望んでいるのは部隊の完全撤退と自分たちの帰宅だ。治安部隊の総司令官はその条件に同意し、以後24時間は手を出さないと保障する。その保証は守られない。同じ日の晩に逮捕がはじまる。午後6時30分、坑夫たちは地上に出た。人質にはいかなる危害も加えられなかった(資料「ヴエク炭坑Ⅰ」)。

エピソード

翌日。何人の仲間が欠けているのだろう。誰にもわからない。誰が死に、誰が逮捕され、誰が身を隠したのか。女たちはすっかり望みをなくし、

警察へ出向いてゆくと、近親の者で誰か死んだのだろうかと尋ねた。答えは——「質問はやめる、さもないともっと悪いことが起こるぞ」(地下通信「シロンスク第4次蜂起」)。

「[81年]12月17日午前8時30分。ヴエク炭坑の棚がとり壊された。ブルドーザーが構内をならす。ボイラー室わきのゲートに十字架が立っている。十字架には7つのキャップライトがかかっている。すでに最初の花束とろうそくがそなえてある。瓦礫が山をなし、空気はいまも毒を含んだガスに満ちている。それでも十字架のまわりには人々が群れ集まる。男たちは帽子をとり、女たちはロザリオの折りをつぶやく。ひとつの同じ句が何度何度もくり返される——『わたくしたちは忘れません』。

若者たち(ほとんどが24~26歳)が倒れた、いちばん年長の者でも30をこえたばかりだった(資料「ヴエク炭坑Ⅰ」)。

ある坑夫(祖父の代から炭坑ではたらいっている、父は1921年のシロンスク蜂起の参加者だ)は言う——「春を待とうじゃないか」。

それで?

「また蜂起をおこすさ。おれたちはシロンスクの間人だ。忘れるものか」(地下通信「シロンスク第4次蜂起」)。

ドキュメント「シロンスク 1981年12月」は、事件に加わったり、それを目撃した10数人の人々の話や自主出版の資料(「シロンスク第4次蜂起」「自由なポーランド人の真実」など)、そして、シロンスク地方とザグウェビェ地方の住人からの聞き書きから成っている。ここに紹介したものには多くの脱落、不正確な部分があると思われる。読者諸氏には資料、情報の入手に援助をおねがしたい。

シロンスクの事件ははやくも伝説になろうとしている。さまざまな歌や詩が生まれた。最近われわれの手に届いたひとつをつぎで紹介する。

ピアスト炭坑さいごの班

さあ、みんな、ピアストを出よう

穴から出よう

女たちは泣いている

ケーキを焼いて待っている

黄金のかげがきみらを地上へ運ぶ

さあ、出よう、仕事はおわりだ

看護婦と医者更衣室で待っている

トロッコがきみらを家まで送る

みんなそろった

きみらのたて坑で最後だ

大佐は手を差しさげるだろう

事務所にはお茶がたっている

すべてふだんと同じ、ただ

ヴェクには喪服をまとった女がいる……

朝までゆっくり家でやすんでくれ

きみらは十分にはたらいただから

明日になればつぎの班がおりてゆく

掘って、掘って、掘りぬくだけだ

12人の坑夫はもどらない

4人は死に、3人は法廷に立たされる

その3人は夕方のニュースでののしられる

そのうち2人はよそ者だ

のころひとは政府のまわし者

権力がきみらの服に着がえたのだ

権力の強盗どもの仮装だ

またもや上の観閲広場では

兵隊たちが宣誓だ

けれども、「連帯」の戦士たち

きみらがさがる榮譽のしるしは
石炭のひとつかみ

ポーランドの良心だ

さあ、時はきた……炭坑を出よう

自由ポーランドは地下に追われた
地上では

調和とやすらぎと仕事は孤立したまま……、
自由なくにつくろう

なぜ穴にとじこもる？

さあ、出発だ

黄金のかごにのりこもう

Feliks Świątlik, "Śląsk Grudzień 1981"
[『マンゾシユ「連帯」情報』第20号, 1982年1月
29日付(付録) 訳: 篠崎誠一]



ポ ー ラ ン ド 日 誌

5月6日 ポーランド当局は、この日に予定されていたワレサ委員長とダスタ夫人の面会を延期。

5月9日 「連帯」の地下放送は、5月13日にワルシャワ市内で、正午から15分間のストを行うよう市民・労働者に呼びかける。

5月10日 ポーランド政府当局は、ワルシャワ駐在の米外交官2人に対し、「外交官の地位にふさわしくない行為」があったとして国外退去を命じる。

5月12日 オーストリアを非公式訪問中のラコフスキ副首相は、この日の記者会見で、対西側債務の返済について、これまでのような政府や銀行との個別交渉ではなく、包括的な交渉により債務返済計画を確立し、経済再建に取り組みたいとの意向を示す。

5月13日 ビドゴシチ支部長ルレフスキ氏やクーロン氏など、ワルシャワ近郊のピャウォエンカ収容所に拘留中の「連帯」指導者や顧問ら16人が、戒厳令に抗議するとともに、教会の和解提案を支持するための無期限のハンストに入り、同収容所に拘留中の150人を越える「連帯」メンバーもハンストに入る。

ワルシャワ郊外のウルス・トラクター工場をはじめ、フタ・ワルシャワ製鉄所など主な工場の一部門で、正午から15分間の軍政抗議ストが行われる。正午、ワルシャワの街頭で約5千人の市民が抗議行動を展開し、車は止まって警笛をならす。また、午後6時過ぎから旧市街に約5千人の市民が集結し、9時ごろまで機動隊とにらみ合う。クラブでもミサの後教会の外で「連帯、連帯」と叫んだ群集に警官隊が盾と警棒で規制を始めたため、約1万人が街頭で警官隊と激しく衝突する。この日のストやデモを扇動したとして636人が逮捕、43人が拘禁されている。また、工場での15分ストに参加した理由で労働者が解雇され、警笛で抗議した理由で50人が免許証を取り上げられている。

5月14日 ワレサ氏はILO代表と会見し、その中で同国の経済危機を打開するためには、「国民的な相互理解」が必要だと述べるとともに、労

働組合運動の独立だけは譲れないと語る。

5月16日 国営通信PAPによると、81年に入ってからの日までの間に30人が民警部隊あるいは同軍兵士に対する暴行事件で懲役判決を受けている。

5月19日 ビドゴシチ支部長のルレフスキ氏に対する裁判が始まるが、本人の「健康悪化」を理由に公判は無期延期になる。当局は戒厳令施行以来5ヵ月ぶりに国内全土のダイヤル直通電話の通話を再開。

5月19日 クーロン氏は、収容所からひそかに持ち出されたメッセージの中で、戒厳令に対する国民の暴力的抵抗を呼びかけたという。国営通信PAPによると、5月始めの国内騒乱事件に関連して、この日までに79人が1～2年の実刑判決を受けている。

5月21日 国営通信PAPによると「連帯」地下組織のピラを印刷ないし配布していた「連帯」支援者に最高5年の実刑判決が言い渡される。

5月27日 ポーランド政府スポークスマンは、外国報道人と記者会見し、ワレサ氏が新しい場所に移されたことを明らかにするとともに、ダスタ夫人とこれまで7回、計21日間面会したと語る。ホワイトハウス・スポークスマンは、レーガン大統領がポーランド向け食糧・医薬品追加援助のため総額6870万ドルの政府支出を承認したと発表。

5月28日 ワレサ氏の夫人ダスタさんが明らかにしたところによると、ワレサ氏は既にポーランド南東部のソ連国境に近いプシェミスルに移送されている。

6月1日 グレンプ首座大司教は全国4240教区の司教・副司教に対し、「国民合意に関する国民主座大司教評議会のテーゼ」と題する文書及び同首座大司教の書簡を送付。グラジナ・クーロン夫人によると、クーロン氏ら4人がこの日までに軍政抗議のハンストを中止したという。

6月4日 ヤルゼフスキ、ルーマニア訪問。今回の訪問で戒厳令施行以後東欧6ヵ国すべてを回ったことになる。

6月8日 コメコン加盟国首脳会議開かれる。

6月13日 国営通信PAPによると、戒厳令6ヵ月を経過したこの日、グダンスクとプロツワフで軍政抗議のデモがあり、治安部隊と街頭で衝突する。

6月14日 「ニューズウィーク」誌がポーランド政府・統一労働者党の有力筋から得た情報として伝えているところによると、ヤルゼルスキ政権は8月末までに戒厳令を解除し、ワレサ氏を釈放すると今後の政治日程を作成し、これに向けてワレサ氏及びカトリック教会と交渉を行う方針であり、すでにソ連の承諾を得ているという。

6月15日 ILO総会に出席したローマ法王は「労働者の連帯」をテーマにした演説で「連帯」に対する活動停止措置を間接的に非難。

6月16日 「連帯」ワルシャワ地区委員会は最新の地下機関紙の中で、戒厳令に反対する一切の抗議行動を当分停止すること、及び企業内の各地方暫定委員会に対し、ゼネストを計画するための「中核組織」を結成するよう呼びかける。一方、レーニン造船所では「連帯」グダンスク支部地下

委員会の呼びかけによって、戒厳令の継続に抗議する15分間の時限ストが行われる。

6月25日 「連帯」を支持する数百人の労働者がワルシャワのウルス・トラクター工場前で、1976年の食料品値上げ反対闘争勝利を記念して集会を開く。集会では「連帯」の同工場責任者ヤナス氏が戒厳令に反対する地下抵抗組織を作ろうと呼びかける。一方、ラドムにある食料品値上げ反対闘争記念碑前でも労働者400人が軍政当局に対する抗議の集会を開く。

6月28日 ポーランド西部の工業都市ボズナンで、1956年の「ボズナン暴動」を記念する集会に約1万人が参加。プロツワフでも約500人が参加してボズナン暴動犠牲者追悼デモが行われ、257人が逮捕される。

(鶴崎公敏：編)

ユーモアを武器に——戒厳令下の小話・戯画——

雪ダルマ

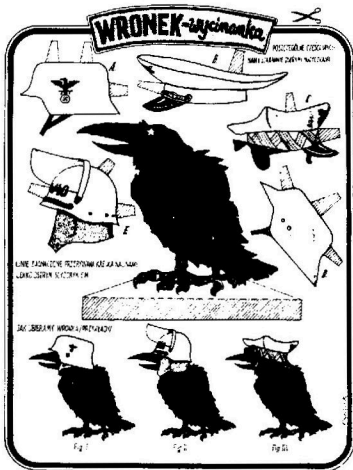
ピアヴォウェンカ監獄で、拘留者たちが雪だるまを作った。將軍の帽子、肩章、勲章をつけ、黒眼鏡もかけさせた。これを見て、拘留者監督将校は、見やぶったと言わんばかりに叫んだ「これはヤルゼルスキではないか。」「いいや、雪だるまですよ」拘留者たちは言いかえした。ムツとした監督将校はいったん執務室に戻った(たぶん何か指示を出すためだろう)。再び出て来るや、断固として要求した。「この雪だるまを壊せ!」。今度は拘留者たちが答えた。「でもこれはヤルゼルスキですよ。」「雪だるまだ」。権力の代理人は言い張った。「ヤルゼルスキです」。拘留者たちも譲らない。

監督将校は罰則やら何やらでおどしをかけ、ようやく拘留者は要求をのむことにした。1人が雪だるまの方へすすみ出て、頭から帽子をむしり取り、肩章をはぎとって降格させ、勲章を取り去り、さらに首を押し落とした。この時、残りの拘留者たちは、おそろしく反社会主義的な歌を歌っていた。

「災いなるかな!」

(訳：鳥井摩利)

カラス (WRONa) のきせかえ人形。
ZOMO (警察機動部隊) やナチスやヤルゼルスキの帽子をかぶらせるようになっている。



『ポーランド月報』既刊号全目次

創刊準備号 1981・11・1 16頁 300円 (品切)

『ポーランド月報』発刊の辞 工藤幸雄……………1

「連帯」の綱領的立場は何か

「連帯」全国調整委議事録 (81年7月)……………2

ポーランド日誌 1981年8月……………10

ポーランド資料センター文献目録 (I)……………14

ポーランド資料センター設立呼びかけ……………15

ポーランド資料センター資金拠出のお願い……………16

創刊号 1982・1・18 20頁 500円

「連帯」は滅びず 工藤幸雄……………1

自由・公正・独立

自治共和国クラブ創設期成声明……………2

独立自治労組「連帯」がめざしたもの

——綱領を読んで 伊東孝之……………7

「連帯」綱領……………10

「もはやなんびとも、何ごとも社会に押しつけたりできない……」 J・クローン……………15

ポーランド日誌 (1981年9月～12月)……………17

ポーランド資料センター文献目録 (II)……………19

ポーランド軍政を糾弾し「連帯」と連帯する

知識人・文化人の声明 1982・12・26……………20

第2号 1982・3・25 24頁 400円

「連帯」全ポーランド抵抗委員会は呼びかける……………2

結成宣言 1982年1月13日

ポーランド国民に対するアピール

「連帯」全活動家諸君へ Z・ヤナス……………3

「連帯」ラドム会議議事録 (81・12・3)……………5

「連帯」全国委員会決議 (81・12・11～12)……………10

選択のとき：自治から政党へ (上)

座談会：クローン、ゲレメク、ブヤク、ミレフスキ、リティンスキ、プガイ……………11

なぜ「労働者クラブ」を創設しなければなら
ないのか ヤン・リティンスキ……………14

「鎮圧されながらもポーランドの闘いは続く」

インタビューチェコ反対派Z・ムリナーシ氏……………17

文献紹介……………21

ポーランド日誌 (81・12・13～82・2・13)……………22

第3号 1982年5月15日 28頁 400円

大衆的・日常的な社会の抵抗を

インタビュー：Z・ブヤク、W・クレルスキ……………2

なぜ戒厳令は施行されたか

その過程と当面する事態の予測 DiP……………6

1956—1970—1980

ある歴史家の省察 K・ケルステン……………14

選択のとき：自治から政党へ (下)……………20

社会の闇を破る活動を A・スモラル

——ポーランド資料センターに期待する……………24

ポーランド日誌 (1982・2・14～5・3)……………25

文献紹介……………26

ポーランド講演集會——西・東……………28

第4号 1982年6月20日 32頁 400円

地底の闘い——シロンスク1981年12月 (上)

フェリクス・シフィエトリク編……………2

「連帯」——自主管理——戒厳令 梅田芳穂……………6

ポーランドの戦争 A・ミフニク……………12

戒厳令下の「連帯」：戦略と戦術

この袋小路からどう抜け出すか J・クローン……………21

陣地戦 Z・ブヤク……………25

第3の道 W・クレルスキ……………26

ポーランドの静かなる革命

——A・スモラル氏に聞く……………28

文献紹介……………32

編集後記

さる6月30日、資料センターが主催して講演会——ポーランド：不屈の「連帯」を開催、梅田芳穂、塩川喜信両氏の講演を聞きました。ゼネラル石油労組事務局長古郡武夫氏にはご

あいさつを頂き、また最近ポーランドを訪問された映画評論家の草壁久四郎氏から現地映画界の現状につきご報告いただきました。

本号は5・6合併号とし、編集部一同夏休みをいただいて、次号は9月中旬刊とする予定です。 1982年7月12日 (み)